

# 2023年度 地域経営学部 地域協働型教育 成果報告書



# はじめに

本報告書は、地域経営学部が2023年度に開講した学年別の演習(ゼミナール)科目的学修成果を取りまとめたものです。本学では2016年度に開学以来、地域協働型教育に関する報告書を毎年刊行しており、本報告書で8冊目を数えることとなります。ちなみに開学から4年間は、大学全体としての報告書でしたが、情報学部が発足した2020年度からは、地域経営学部としての報告書となっています。

本報告書は学年ごとの学習成果を示すために3つのパートに分けて編集されています。1年生を対象とする地域経営演習I・IIのパートでは、開講した6つのクラスそれぞれに1頁を割り当てています。クラスを担当した教員による活動内容と学修の狙いに関する説明に続いて、受講学生が学びから得たこと、気づいたことを語っています。2年生と3年生を対象とする地域経営演習III・IVと地域経営研究I・IIのパートでは、担当教員ごとに半頁を割り当て、教員による学修の狙いについての説明に続いて、両学年の受講学生が学びから得たこと、気づいたことを語っています。4年生を対象とする卒業研究I・IIのパートでは、本年の卒業生たちが提出した全ての卒業論文を取り上げ、その研究題目の一覧を示しています。

地域経営学部では上記以外にもいくつかの演習系科目を設置しています。とりわけ「地域キャリア実習」と「病院実習」は、地域社会で活動する企業、自治体、医療機関等の皆様のご協力のもとで、学生が実務を経験するという意味で、地域協働型教育の重要な構成要素となっています。本年度の報告書においては、「地域キャリア実習」と「病院実習」についても、その代表的な活動事例を取り上げ、概要を紹介しています。

本報告書のタイトルは、「ゼミ活動」成果報告書ではなく「地域協働型教育」成果報告書です。あらためて述べるまでもありませんが、「地域協働型教育」は、本学が開学以来、基本理念として掲げてきた教育目標です。だから本学の演習科目では、学生が教員とともに地域を訪問し、住民の方々と交流・協働して地域の課題を見出し、解決の方策についても検討することが重視されています。本報告書をお読みいただければ、ゼミにおいては地域社会の現場に入り込んだフィールドワークや、課題解決に向けた実践志向の学習が占める比重が高くなっていることがわかるでしょう。

他方、いくつかのゼミでは学生たちが「地域協働型教育」の定番メニューから外れた、ユニークなテーマを追求していることにも注目して下さい。多様なテーマの追求は地域協働型教育からの逸脱を意味するものではありません。地域を学ぶためには、フィールドワーク以外の研究方法も必要であり、直接的な課題解決からは一線を画した理論研究が有効な場合も多いからです。また、ローカルレベルの課題を考える前提として、ナショナルレベル、グローバルレベルの社会問題を理解することも不可欠の作業です。地域協働型教育を健全な方向に発展させていくためには、今後も研究関心の多様性を許容していく姿勢も欠かせないと考えています。

地域経営学部長  
倉田 良樹



## 目次

はじめに
地域経営演習I・II(1年生)
地域経営演習III・IV(2年生)
地域経営研究I・II(3年生)
卒業研究I・II(4年生) テーマ一覧
地域キャリア実習
病院実習

## 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ



# 福知山市 三和地域での学び

教員名 亀井省吾・張明軍



### 活動内容

三和地域において、交流観光まちづくり・公共・企業の視点から演習を実施しました。今年度も、本地域で盛んなスポーツであるペタンクを演習に取り入れています。主なフィールドワークは、三和学園との交流、三和荘グランドでのペタンク実習のほか、大原神社と民泊施設、瑞穂環境保全センター、新しいものづくりや六次産業化を目指す企業の現場視察などです。なお、当初よりチームを組成し活動を行ってきています。

### 学びから得たこと・身につけたこと

本演習で得た学びのうち最も印象的だったのは、「地域資源としての企業」という視点です。これまで私は社会貢献や地域活動といった、所謂ESGの取り組みについて、単なる投資家対策という見方しかできませんでした。しかし本演習で様々な企業のお話を伺う中、地域産業の持続可能化や雇用問題の解決に確かに繋がっていることに気付きました。今後経営についてゼミで学んでいく中でも、多角的に企業を観察する姿勢を忘れないようにしたいです。

近藤 咲朱

三和町をフィールドに演習を行って、限りある資源、地域産業から地域内で何が出来るか、また成果報告に向けて関係人口をどう増やしていくか考えてきて、地域課題解決に向けた解決策や提案を組み立てる力は養われたと思いました。また、三和町についてほぼ知識がなかったですが、地域産業、施設、教育機関など実際現地を訪れ直接学ぶことができたので、三和町内の暮らしや文化に直接触れ、地域課題を現実的に考えられるようになりました。

竹田 千晴

私はこの演習から問題解決の難しさを学びました。地域問題を解決するときに、理論的な解決案や対策案のみでは駄目であり、住んでいる住民の方々の気持ちに寄り添っていきながら考えなくてはならないため、一筋縄ではいかないんだなと感じました。また、合併した地域の問題を解決するにはさらに大変であり、財源が合併した市や町のほうに移っていることから、財源が少ない状態で解決していかなくてはならないため、難しいなと感じました。

柳瀬 大勇

# 福知山市・夜久野地域での学び

教員名 神谷達夫・中尾誠二



## 活動内容・学修のねらい

前学期は、第1回(5月18日)福知山市夜久野支所・夜久野みらいまちづくり協議会・図書館等の機能が集約された『夜久野ふれあいプラザ』等、第2回(6月1日)大畠地区等の登山愛好者組織『居母山クラブ』、第3回(6月15日)道の駅『農匠の郷やくの』および奥水坂集落、第4回(6月29日)古民家活用『宮カフェ』、第5回(7月13日)農家民宿&お試し住宅『米ya』で各回フィールドワークを行いました。

後学期は、第1回(10月1日)『居母山クラブ』田圃アート稻刈り体験、第2回(10月26日)『才谷の石田さん宅』訪問、第3回(12月9日)『夜久野学園』中2生との交流は全員で、それ以外は学生が選んだテーマに応じた複数班それぞれ現地を訪問し、実践的な演習を行いました。複数の学生は規定授業時間以外にも『米ya』宿泊(12月22日・2024年2月13日)、『居母山クラブ』餅つき参加(12月29日)等で交流を深めました。

--  
これらを通して夜久野地域での取組を学びました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

私はこれまでフィールドワークを踏まえた探究授業を行ったことがあります。これほどまで地域に密着し、現地の方と触れ合いながら、地方創生について真剣に向き合ったことがなかったので、とても貴重な活動ができました。私がこの授業から学んだのは人との関りだと考えます。班のみんなと協力して発表準備をするのももちろん、地域の方と仲良くなりつながりを増やすなど、いかに人との関りが大事なのかを学ぶことができました。

青山航大

私はこの演習で“楽しい”が“地域活性”そのものであるということを知りました。活性化に対しては、“頑張らなければならない”意識を自然と持ってしまいますが、その地域の人人が自分の楽しいを追求することが地域の復興の一歩の近道なのではないかと感じました。一方でそういった意識になると地域を知るうえで大切であると感じました。また、演習で身に着けた力も多く、特にコミュニケーション能力は今後も大切にしていきたいです。

杉本晃都

私はこの演習で“楽しい”が“地域活性”そのものであるということを知りました。活性化に対しては、“頑張らなければならない”意識を自然と持ってしまいますが、その地域の人人が自分の楽しいを追求することが地域の復興の一歩の近道なのではないかと感じました。一方でそういった意識になると地域を知るうえで大切であると感じました。また、演習で身に着けた力も多く、特にコミュニケーション能力は今後も大切にしていきたいです。

竹内沙也香

フィールドワークでは夜久野町の地域課題や活動を知り、人のあたたかみに触れました。誰と話しても皆さん笑顔で、自分の住んでいる町が大好きで誇りに思っていることがすぐ伝わってきました。移住者さんのお話では、夜久野に訪問した際、夜久野の方から親切に教えてもらい「〇〇さんがいるから」と移住先を夜久野に決めたそうです。地域の魅力は環境でも、生活のしやすさでもなく、一番に「ひと」だということを実感しました。

藤井美羽

# 福知山市・大江地域での学び

教員名 福富真治・大門大朗



## 活動内容

前学期では、座学として、①福知山市の地域行政や大江町についての講義、②実践手法の学習などを学びました。また、バスによる大江町の視察を2回行い、観光資源を切り口として大江町の地域特性を理解することを心がけました。後学期では、①グルメマップ班、②鬼の面コンテスト班、③ランタンフェスタ班、に分かれ、グループワークやイベント実施などの活動をし、最終回でプレゼンテーションを行いました。

## 学修のねらい

前学期は、地域の方からの講演やフィールドワークを通じて、大江について広く知ることを目指しました。後学期では、「大江に貢献できる取り組み」をテーマに、地域住民の協力を得ながら学生主体で活動内容を検討・決定しました。実際の活動においては、二年次以後の地域活動に活かせる学修とするため、地域の方と連携を取りながら協働して進め、地域住民に成果を還元できるよう努めました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

前学期は大江町に足を運び、歴史や文化・課題などを学び、後学期は、各グループに分かれプロジェクトを計画・実行しました。私のグループは大江町の和紙を活かしたキャンドルフェスタを実行しました。市役所の方・地域の方々・丹後和紙さんにもご協力いただき、地域の特産品を活かしながらも、幅広い世代が交流することができるコミュニティを形成することができたのが嬉しかったです。この取り組みを活かして、ゼミにも積極的に取り組みます。

新垣 禾乃

大江町は多くの魅力的な飲食店があるものの、その魅力が十分伝わっていないと感じました。そこで、大学生からみた町の魅力を発信したいと考え、取材を行い、パンフレットを作成しました。活動を通して、「人への感謝」の大切さに気付きました。飲食店の方、地域の方、そして、活動を共にしたグループのメンバーは誰か一人でもいなければ、演習の活動は成り立ちませんでした。これから的生活の中でも「人への感謝」を忘れずに過ごしていきたいです。

藤澤 健多  
上廣 萌久

私は、この授業を通して大江の“まちの魅力”である「和紙」の深掘りを行い、それを地元の方へ伝播させるための機会として、「ランタンフェスタ」を企画・運営しました。結果としては目標の参加者数20人を超える高い満足度も達成し大変意義のある活動だったと感じています。活動を通して学べたことの一つとして「自分の適性」を知ることができました。私自身も自分の中にリーダーシップがあることを初めて知覚できました。

尾崎 航

# 地域との協働実践を通して プロジェクトマネジメントを学ぶ

教員名 谷口知弘・小山元孝



## 活動内容

桃映中学校区をフィールドに公民館活動の問題解決を試みる2つのプロジェクトを実践しました。

- 桃映地域公民館PJは、公民館と協働で多世代交流の促進を試みました。大学生と子どもや地域住民の交流の場づくりとして紙芝居の読み聞かせや交流カフェを実施しました。
- 大正地域公民館PJは、公民館まつりで幅広い世代が交流できるように、スタンプラリーやじゃんけん大会、インタビュー企画を実施しました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

この演習を通して、大学生の私たちが地域の方々とどう関わっていけばいいかという方法の一つを学んだと感じます。読み聞かせでは、子供達や親世代の方とお話をすることの機会が多くありました。また、カフェを通して、私はアンケート調査を行い、多世代の人と話しました。大学生に対する前向きな意見は多く、大学生がもっと積極的に出ていけば、地域の方々との交流はより盛んになり、地域の人と関わるうとする自主性と積極性が大切だと感じました。

熊尾夏希

私はこの1年の演習を通して人と協力することの大切さを学びました。実際にまちに出向いて地域を見たり、地域の方のお話を聞いたり、行事の運営を通して地域のあり方や価値を考えることが出来ました。福知山市での活動でしたが、自分の地元のことについても考えるきっかけとなりました。また地域についての考え方や考える上での知識を学ぶことができました。

長久保惣靖

この授業は大学の授業の中でも1番活動的な授業だと感じます。実際にまちに出向いて地域を見たり、地域の方のお話を聞いたり、行事の運営を通して地域のあり方や価値を考えることが出来ました。福知山市での活動でしたが、自分の地元のことについても考えるきっかけとなりました。また地域についての考え方や考える上での知識を学ぶことができました。

大城琴

1年間の授業を通して学んだことは大規模な企画を運営するとの難しさです。この授業で取り組んだ公民館祭りでは老若男女問わず多くの人に楽しんでいただける企画を考えましたが、実際に行つてみると配慮が足りていないと感じる部分も多々あり反省点も残る形となりました。また、普段では関わることの無いような方々との交流で自分にはない考えに触れる貴重な機会だと感じました。

金子創士

# 廃校活用・地域づくり組織から 考える地域PBL (Project Based Learning)

教員名 木村昭興・杉岡秀紀



## 活動内容

1-Eクラスは2グループに分かれ活動を展開しました。川合チームは、近年、三和町にある旧川合小学校にて、フィールドワークのほか、「かわい元気まつり」におけるニュースポーツの実践やアンケート調査、空き小屋のリノベーションに取り組みました。庵我チームは、まちづくり協議会準備委員会へのヒアリング、まちなかフィールドワークのほか、地元の地域団体が開催する「世代を繋ぐ着物ショー」に協力し、アンケート調査を行いました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

一年間様々なフィールドに向いてみて、強く感じたのは地域の人たちが持つ思いというのは誰よりも強く、自分たちでは計り知れないものなのだと感じました。旧川合小学校では土佐祐司さんの描く未来の地域を何度も聞かせて頂きました。その度に大きな熱意を感じ、とても心を動かされました。今後も旧川合小学校に携わる機会があるといいなと思います。また、多くの企業の人たちとも関わらせていただいたのもいい経験になりました。

加藤典汰

1年を通して、地域活動に密に関わることが出来て本当に良い経験になりました。特産物など、地域を元気づける要素が少ないのでと思っていた庵我でしたが、フィールドワークに行ったり、地域イベントに参加すると、外側では見ることすら出来なかった、地域の良さに触れることができ、よく理解することができたと思います。演習を通して、自分として至らないと感じた点も何度もありました。それも含め勉強になりました。

中村穂高

この1年間で多くのフィールドワークの機会があり、実際に現場で活動されている方のお話を聞く中で沢山の新たな発見がありました。特に、旧川合小学校で開催されたかわい元気まつりでは地域の方々と深く関わり、交流を大事にされている事、前向きに明るく活動されている事が印象的でした。フィールドワーク以外でも普段は関わらない方々とも関わり貴重な経験ができました。今後も地域と関わり様々な学びを得ていきたいと思います。

片桐彩花

1年間を通して学んだ点は、自分で考え、まとめてそれを相手に伝えることの大切さです。毎回授業の最初に自分の感じたことを短い時間でまとめて発表する時間がったり、ゲストの方のお話を聞いて質問を考えるなど、今まで時間をかけてじっくり考えていたことを短い時間でまとめる難しさを実感しました。また、普段関わることのない地元の経営者の方とお話しする機会もあって、とても貴重な機会を経験できたと思います。

川下柚名

# 医療福祉の地域課題を知り 世界的視野で解決方法を考える

教員名 川島典子・岡本悦司・星雅丈



## 活動内容

人口減少や高齢化が著しい中山間地域の現状を知るために、福知山市大江町、雲原地区、宮津市、舞鶴市などにフィールドワークに出かけました。その後、事後学習として元舞鶴市長さんに舞鶴市の医療について講話して頂いたりもしています。今年は、グローバルな視点を養うために、デンマークからゲストスピーカーを招き、デンマークの福祉や医療に関する講話もして頂き、対話式講義によって課題を解決する方法を考えました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

授業でフィールドワークに出向いたり、特別講義を聞いたりして保健医療分野における地域経営に必要なことや診療情報管理士について学習しました。医療も福祉もその地域の特徴に合ったものにすることや地域住民の参画、協働が重要であることを学びました。フィールドワークに行き、実際に見聞きすることでその地域や施設での取り組みに触れ、新たな視点や知識が得られました。また、授業で学んだことを報告することの重要性も学ぶことができました。

越智清香

私は地域経営演習Ⅰ・Ⅱの中で、地元である京都府北部の医療福祉について、その現状を知ることができました。雲原地区や大江町などをはじめとした京都府北部地域の少子高齢化は深刻であり、今後の医療福祉を持続可能なものにするためには様々な課題があることを知りました。そのうえで、授業でも扱ったソーシャル・キャピタルをうまく活用していくことや介護予防の取り組みを徹底することの重要性を身をもって感じることができました。

近久仙一

## 学修のねらい

人口減少社会において、保健医療福祉の視座から地域経営について考え、課題解決の方法を自ら考えてもらうことを学修のねらいとしました。それゆえ、まず、地域の課題を知ることを目的として、高齢化と人口減少の著しい福知山市内の中山間地域にフィールドワークに出かけました。また、独自の進んだ医療体制を確立している舞鶴市の医療について知ってもらうために、舞鶴市にも赴き、医師で元舞鶴市長さんに事後学習をして頂きました。

## 地域経営演習Ⅲ・Ⅳ



# 地方創生における自治体と大学の役割と関係性

教員名 井上直樹



## 学修のねらい

少子高齢化の進展は、日本など各国の社会や経済に影響を及ぼしています。消滅が危惧される地域が存在するなかで、地方創生における自治体と大学の役割、および、両者のるべき関係を明らかにします。

3年生以降のゼミでは、財務情報と非財務情報をあわせた統合報告を取り上げます。企業、大学等で作成・公表されている統合報告書の特徴を把握し、組織内外の利害関係者による定量・定性分析に役立つ統合報告の導入による地域・組織の課題解決や新たな価値の創造について学ぶ予定です。

そのために必要な基礎力を養成するため、2年生のゼミでは、人口、出生率などの非財務情報について関連する統計調査を分析し、福知山市における現状と課題を定量的に把握する演習を行いました。また、福知山公立大学を題材にして、地方独立行政法人の制度、会計、ガバナンスの理解を深め、公立大学におけるお金の使われ方と果たすべき役割を考察しました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

前学期では、福知山市の現状を分析し課題を見つける中で、定量的な調査の分析や調査の仕方を学ぶことができました。また、発表時に伝わりやすい資料の作成方法を学びました。

後学期では、福知山公立大学の財務諸表からお金の使われ方を調査しました。これまで学んだ簿記などの知識を使いまとめる中で出た疑問を解決するために、実際に仕事に携わっている方にインタビューを行いました。

地方独立行政法人について、特に公立大学法人の会計制度について実際の例をもとに財務諸表を使いながら分析することで、お金の使われ方や流れ、特殊な勘定科目を学ぶことができました。また、その他制度やガバナンスなどを文献などから学ぶことができました。座学を中心に実践的な活動を行うことができ、今後の学びや活動につなげることができる有意義な1年間を過ごすことができました。

宮崎夢香

# 各市町への訪問を通して、北近畿の多様性を知る

教員名 大谷杏



## 学修のねらい

2年生のゼミでは、各市町に焦点を当て、「事前調査」、「現地調査」、「報告」の3段階で北近畿の多様性について学びます。訪問先は社会教育施設を中心とした北近畿の名所です。2023年度は前学期に、福知山市(三段池公園、御靈神社、丹波生活衣館、ゆらのガーデン、福知山城、佐藤太清記念美術館)、伊根町(伊根町観光協会「舟屋ガイドとめぐる、まるごと伊根体験」参加)、京丹後市(アミティ丹後、琴引浜、琴引浜鳴き砂文化館)、綾部市(あやべゲンゼスクエア)、朝来市(生野銀山)、後学期に宮津市(傘松公園、ふるさとミュージアム丹後、道の駅海の京都宮津)、舞鶴市(赤レンガ博物館、舞鶴引揚記念館)、田辺城、舞鶴市郷土資料館)、与謝野町(与謝野町観光協会「与謝野町ガイドウォーク」参加)、旧尾藤家住宅、加悦鉄道資料館)、丹波市(柏原陣屋跡、丹波市立柏原歴史民俗資料館・田ステラ記念館、木の根橋、太鼓櫓)などを訪問しました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

一年間を通して北近畿地域のすべての市町を訪問しました。事前に調査して訪れることでその土地についての知識を持った上で地域の空気感なども感じ知識を深めることができました。昨年は北近畿について知る場面が多くあるものの身近に感じることはなかったですが、訪れることで北近畿が身近に感じるとともに魅力を知ることができました。各地で感じ、見つけたことをゼミ生で共有することで自分では発見できなかったその土地の魅力や気づきを得ました。

新熊玲美

ゼミでは北近畿の9市町をフィールドワークしました。訪れる市町について事前調査をし、そこでは知ることができなかったその市町の魅力や課題を実際に訪れることで見つけることが出来ました。またフィールドワークをして得た情報の中から自分が伝えたいことを取捨選択し、それを自分なりにまとめて、発表をしました。来年は今年度得たことを活かして活動していきたいです。

野村梨笑

# 地域医療ゼミ

教員名 岡本悦司



## 学修のねらい

医療圏(複数市町村を束ねた医療計画を作成する区域)ごとに2025年を目指して病院病床の再編をめざす地域医療構想が進行しています。その基礎資料として全病院が毎年データを提供(病床機能報告)し、またDPCという請求システムを採用する病院は詳細な入院データも提供するようになりました。本ゼミは、それらを加工したデータウェアハウスを操作し、任意に選択した医療圏(たとえば自己の出身地や就職希望地)の医療実態を分析し、地域医療構想の進捗状況を評価するスキルを養います。12月に開催される「京都から発信する政策研究交流大会」では全員で京都府中丹医療圏を各自の医療圏と比較した分析結果を発表します。

## 学びから得たこと・身につけたこと

データウェアハウス(DWH)化された統計資料の利用方法から教わり、病床機能報告DWHを用いて、前学期は各出身の医療圏の病院の入棟元・退棟先の状況を特徴別に分類し、後学期は中丹医療圏の入棟元・退棟先の状況を分析して、各地域で病院が他の施設とどのように連携を図っているのか、見えてくる課題は何かを明確にしました。ゼミを通して地域医療の実態を関連資料を併用した分析方法について学ぶことができました。

千原優里佳

地域経営演習Ⅳでは、京都府の政策交流大会へ参加しました。政策交流大会へ向けての準備や個人活動を経て、EXCELの活用方法やデータウェアハウスの便利さを理解することができました。また、政策交流大会の準備段階ではEXCELでデータの加工をしたり、そのデータを活用して分析をしたりとたくさんのスキルを身につけることができました。

五十嵐成美

# キャリアパスを意識した能力開発

教員名 加藤好雄



## 学修のねらい

本演習では、受講生は資格取得と実践的な学習経験を通じて、キャリアパスを意識した能力開発を目指します。具体的には、TOEIC、ITパスポート、簿記2級の資格取得に向けた学習を行うことで、実務に必要な言語能力と基礎的なIT及び会計スキルを修得します。また、情報共有ツールを用いた非同期型学習によって、企業価値評価、マーケティング、人的資本経営などのトピックについて深く掘り下げています。さらに、受講生はマーケティングカンファレンス2023に参加し、業界の最新トレンドや事例を学び、次年度の報告の準備を開始します。報告テーマは「食品×感情」に設定して、文献レビューを通じて、消費者行動と感情の相互作用について理解を深めています。最終的には、マーケティングカンファレンス2024への中間報告の位置付けとして、「AI駆動型のマーケティング分析:身体化認知理論のケース」の論題で学内で報告を行いました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

1年を通して、基礎的な資格の取得、非同期型学習によるレクチャー&レジュメ作成を行い、戦略思考やマーケティング用語について学ぶことができました。さらに、10月はマーケティングカンファレンス2023へ参加し、その後、翌年のカンファレンスに向け、「食品×感情」をテーマにした文献レビューを行いました。カンファレンスに向けて、手法や分析について学びながら自身の研究テーマを探ることができました。

石龜礼菜

前学期は、非同期型学習を通じてマーケティングに関する基礎知識の修得や読みやすいレポート・レジュメの作成方法について学びました。後学期は、マーケティングカンファレンス2023へ参加し、マーケティングカンファレンス2024に向けて先行研究について学ぶとともに、「食品×感情」をテーマにした文献レビューを行いました。また、1年間を通してTOEICやITパスポートなどの資格取得を行いました。

牧田明日加

# 地域活性化のための取り組み

教員名 神谷達夫



## 学修のねらい

このゼミは、地域に役立つことを自分で考え、考えたことを実行することを目標にしています。したがって、それぞれの学生は、それぞれ違ったテーマに取り組むことになります。本年度は、イルミネーションイベントの運営、音楽の特徴抽出、ビデオゲームに対する人の応答がテーマでありました。

イルミネーションイベントの運営では、福知山城で実施された「イル未来と2023」に出展しました。このイベントでは、イベントの運営支援と竹灯籠の展示、次年度に向けた実験として画像処理による人の検出を取り組みました。

音楽の特徴抽出のテーマでは、男性J-POPグループのステージと発売されたCD等のメディアとの音の差を調査するための予備的な実験を行いました。

ビデオゲームに対する人の応答のテーマでは、FPS型のゲームに適している人間を見つけるための方法を検討しました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

ゼミの中で、人と関わり合う中で自分の知らない分野について触れることができて、とてもいい経験になりました。自分の好きな分野をその分野を知らない人に説明するのが難しく、理解してもらうための工夫が大変でした。

学生の自由意志の下、好きなように討論して、議論が白熱することが多かったです。個人的に興味のあるテーマについて調べる楽しさがあります。

# 企業と地域 —クラウドファンディング 活用と経営戦略の観点から—

教員名 亀井省吾



## 学修のねらい

本演習では、地域活性化への活用が期待されるクラウドファンディング(以下CF)の擬似体験や、地域発のグローバル企業の視察などを通じて、企業と地域社会の関わりを実地に体感すること狙いとしています。地域経営演習Ⅲでは、CFについて基礎を学んだ後、地域におけるサードプレイスとしてのカフェを題材に起案を擬似体験しました。地域経営演習Ⅳでは、ゲンゼ綾部本社の記念館・博物苑を訪問し、創業から今日に至る事業を理解した後、同社ドメイン戦略の変遷を事業ポートフォリオマトリクスを用いてチーム分析しました。さらに、未来像を考察する中で、ゲンゼ研究所の先端研究を題材に用途開発を考案し、提案プレゼンテーションを実施しました。本演習ではゲストとして、CF業界第一人者である板越ジョージ氏はじめ、企業経営者やマネージャーを招聘し実施しています。

## 学びから得たこと・身につけたこと

演習を通して、クラウドファンディングの提案や企業経営者やマネージャーとのディスカッション、GUNZEの経営戦略の分析を行い、理論的な分析手法を身につけることができました。理論のフレームを通して同社の事業ドメインの変遷を分析し、地域社会への貢献を軸とした企業の未来像を展望しました。この経験から、論理的思考が視野を拡大し、気づきに繋がることを実感しました。今後はこれらの学びを生かし、実践的な活動に繋げていきたいです。

本演習では、フィールドワーク、ゲスト講義、実践的な事業構想を通して様々な力を養うことができました。特に事業構想では、フレームワークを活用することで、論理的な分析が可能となり、より厚みのある構想ができるようになりました。また、GUNZE株式会社では、GUNZE博物苑によって創業理念を追体験しつつも、環境変化に対応するために、自己変革していくことで独自の価値提案を実現していることを知り、その重要性を学びました。

高島駿斗

# 日本の社会福祉と 世界の福祉の現場を 知ろう!

教員名 川島典子



## 学修のねらい

本演習では社会福祉の視座から地域経営について考えることを学修のねらいとしています。2年次では、京都府北部の福祉施設や社会福祉協議会にフィールドワークに行き、社会福祉の現場を知ることを主な演習の目的としました。その上で、アカデミックライティングになれるための輪読も行い、卒論執筆にも備えています。また、今年度は、グローバルな視点を身につけることを目的として、デンマーク在住者主催の研修塾にも参加しました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

ゼミではアカデミックライティングに慣れるための輪読とフィールドワークを行いました。又、興味のある本を読んでpppにまとめ、発表しました。他のゼミ生に分かりやすいように工夫してpppにまとめる作業は勉強になりました。フィールドワークは、介護施設のグリーンピラ夜久野と伊根町社協を訪れ、実際の現場を体験しました。高齢の方と話す機会が無かったため、私にとって、とても良い経験になりました。

坪内烈士

1年間のゼミ活動で福祉についての理解が深まったと思います。特に印象的だったのはデンマークから来られた千葉さんのお話を聞いたことでした。デンマークは、徹底した福祉国家です。デンマーク在住者のお話を直接聞くことで、日本とデンマークの違いや、日本の福祉の課題を知る機会になりました。又、ゼミ旅行で行った伊根町社会福祉協議会での高齢の方との交流では高齢者の皆さんのお話を聞いて高齢者福祉に興味が湧きました。

大槻真白

# 統合報告書を 軸にした価値共創 プロセス

教員名 木村昭興



## 学修のねらい

本演習は、地域コミュニティを構成する民間企業の経営状況を把握し、会計の視点から行政の役割について学ぶことが目的です。具体的には、①財務会計の仕組みと、②財務情報や非財務情報の定量的・定性的分析手法に焦点をあてます。①では、財務会計の情報提供機能を理解し、プレゼンテーションスキルの向上を目指しました。②では、分析手法を学び、インタビュー調査を通じて地域の課題を把握しました。今年度のテーマは、統合報告書の役割を理解し、多様なステークホルダーによる価値共創プロセスについて考察しました。その考察を踏まえて、夜久野地域の再生に向けた政策提言を行いました。夜久野地域の休眠している有形固定資産の再生に向けて、社会・関係資本を活用した価値創造の可能性を提言しました。この提言は、京都から発信する政策研究交流大会で報告しました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

ゼミでは、京都から発信する政策交流大会での発表に向けて活動を行いました。ゼミ活動で学んだことは、定性調査の大切さです。インタビュー調査から地域課題を発見し、地域住民との対話を通じてその解決策を検討しました。まちづくり協議会の活動に参加し、継続的なインタビュー調査を行うことで、定量調査だけでは見えない課題を発見できました。地域課題の解決に向けて地域コミュニティが重要な役割を担うことを理解しました。

小林稜太郎

前学期は統合報告書やまちづくり協議会、質的調査などについての学習、後学期は実際に質的調査を行うなど「京都から発信する政策研究交流大会」参加にむけた活動を行いました。この1年間のゼミ活動を通して、地域経営についての基礎知識を得ることができ、また、それをもとに地域課題を発掘する力と、新たな価値を創造するための政策を生み出す力を身につけることができました。来年度への重要な経験となりました。

花谷歩

# まち歩きイベントを通じた 地域資源の活用と その課題について

教員名 小山元孝



## 学修のねらい

京丹後市峰山町の金刀比羅神社には全国的に珍しい「狛猫」があります。この「狛猫」を活かした地域イベント「こまねこまつり」が2016年から開催されており、その一事業としてまち歩きイベント「てくてく我がまち再発見・こまねこウォーク」が2017年から開催されています。この事業を通じて地域資源の発掘やその活用方法について考えました。

開催地附近は古墳や遺跡が数多くあるほか、丹後ちりめんの産地としても知られていますが、こうした地域の歴史を地元民が自らの言葉で発信することや、観光名所としてPRすることが弱点がありました。2023年は「峰山の古今食文化をめぐる」と題して、峰山町内の飲食店や醸造会社を巡るコースを設定して参加者を募集しました。10月15日イベント当日には約30名の参加者が集まり、ゼミ生がガイド役となり参加者を案内しました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

店舗で従業員の方からお話を聞く際に、相槌をうつたり食材や工程の写真を持ったりしながら話をしたら、お客さんはより深い学びになったのではないかと思いました。とはいえば普段見ることのできない場所や聞けない話があり満足度は高かったと思います。ガイド役の学生同士で、自分が話す内容やお店の方から聞く内容を共有しておいたら、話を繋げるのに困らなかったと思います。各班で話す内容に偏りがあったことが反省点です。

竹内萌

話を聞く際に、合いの手がうまく入れられなかつたり、お店の方と参加者の交流がうまくいかず沈黙の時間ができてしまつたりしたことが反省点です。しかし、参加者の皆様が楽しんでくれ、撮影係で協力いただいた京都産業大学の学生さんと仲良くなれ、ゼミの先輩と交流が深められたことは良かったです。

寒竹尚也

# 観光地域づくりの 観点から海の京都 観光圏を考える

教員名 佐藤充



## 学修のねらい

本演習は、観光分野の学術的な文献から理論的な枠組みを理解し、海の京都観光圏を対象にして、観光地域づくりの現状と課題を理解することが目的でした。

一年間を通して、文献輪読による理論学習だけではなく、フィールドワークにも取り組んでもらうことで、海の京都観光圏における観光地域づくりの現場での経験も大切にしました。本演習では、「理論」と「実践」を往還させ、知識だけでもなく、経験だけでもない、両者を結び付ける学びを重視しました。

地域協働の観点からは、フィールドワークにおいて、京丹後市の夕日ヶ浦観光協会と伊根町の観光関連事業者と連携したプロジェクトを実施しました。2・3回生の合同チームを作り、地域住民と観光客向けのイベント参加、地域住民向けの意識調査の集計・分析、公式SNSを活用したデジタルマーケティング、観光者向けのお土産品づくりを行いました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

ゼミ活動では、実社会で役立つスキルが身についたと思います。例えば、SNSを運用するための投稿づくりや、観光協会の方々などのやり取り、アンケートデータの分析、論文の要約、少人数での司会、自分の意見を発表することなどが挙げられます。特に、観光協会のSNS運用は、投稿内容の企画・作成はもちろんですが、投稿に至るまでの話し合いや準備も貴重な経験となりました。これらは、ゼミがなければ経験しなかつたことであると思います。

今中志保

この1年、文献講読と伊根町へのフィールドワークを行いました。文献講読では、観光ブランドづくりへの基礎知識、地域引力の生み出し方ならびに疑問点を持つことへの大切さを学びました。伊根町へのフィールドワークでは、伊根町の観光客の現状を知ることができました。また売る側と買う側、両方の立場に立った視点でのお土産開発の難しさを知ることができました。以上のことを踏まえ、来年度の活動への取り組み方や考え方を深めようと思いました。

関岡慎

# 問題意識をもって 学修に勤しむ

教員名 佐藤恵



## 学修のねらい

大学2年目で、かつゼミ1年目の学生であることから、自ら考える力の習得を最大の課題としました。

本ゼミは、3年次以降の継続を前提としません。そのため、3年次に異なるゼミに進んでも困窮しないために、研究活動に必要である作法を身につけることも目標としました。まず、興味のある領域と問題意識をもとに、関連文献のreviewを学ばせました。次いで、データの取得法や分析方法を学ぶために、アンケート調査を実施されました。1年を通して、統計学の輪読会と高校数学の復習を実施しました。比叡山と和歌山県広川町に調査旅行に出向きました。1年間を通じて統計学の輪読会と時事問題に基づく議論を行いました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

私はゼミで主に3つのことに取り組みました。統計学のテキストの輪読会と新聞の記事をもとにした議論です。3つ目には、個人の研究が挙げられます。私は大学生の地震に関する意識の分析を取り組みました。和歌山県広川町の関連施設を訪問し、実地調査も行いました。

猪坂周平

個人的なゼミ活動としては、健康リテラシーと食習慣・運動習慣の関連についての福知山公立大生を対象としたアンケート調査が挙げられます。比叡山登山前後で、健康関連のデータ取得も行いました。

全体的なゼミ活動では、和歌山県で過去に地震による津波の被害を受けた地域へ行き、資料館などを訪れました。また、気になつた記事についての議論や、統計学についての勉強を行いました。

中井朋香

# 多様性のある社会について考える: 異文化理解の視点から

教員名 渋谷節子



## 学修のねらい

文献講読及びディスカッションと地域でのフィールドワークにおける実践、個別研究を通して、文化・社会の多様性について異文化理解の視点から考え、自らの研究を通して多様性のある社会作りについて、その難しさや課題も含めて考察を行います。具体的には、①異文化理解を実践し、文化・社会の多様性について考えるフィールドワーク、②バックボーンとなる異文化理解や文化・社会の多様性に関する文献講読、③文化・社会の多様性について自ら関心があるテーマの個別研究の3つを行い、日本や世界の多様な文化を学びながら、地域の外国人留学生との共同学習等を通して異文化理解の難しさや多文化社会の課題と解決策について自ら考える力を育てます。より豊かな地域社会を作る上で文化・社会の多様性がいかなる役割を果たすのか、多様性のある社会を実現する上での課題は何か、どのように課題を乗り越えていくことができるかを、理論と実践の両面から考えます。

## 学びから得たこと・身につけたこと

日本語学校の生徒との交流、宗教施設への訪問等といったフィールドワークを通して、日本での異文化・多文化を実際に体験することが出来ました。1年間のゼミ活動を通して、1人1人のバックグラウンドが違えば、当然文化や価値観も違うことを実感しました。また、歩み寄りや理解を示す姿勢も人それぞれであるため、不平等が生まれないようなコミュニケーションの取り方が必要ではないかと考えました。

笹島未有

文献講読を通して、世界の多様性の尊さや豊かさを学び、より包括的な視野を得ました。また、フィールドワークでは文化やコミュニティと直接触れる貴重な経験をしました。活動を通して、私たちの生活や文化の中には、様々な文化的要素が溶け込んでいることに気付きました。そして、異文化に触ることは、面白さや異文化に対する理解への難しさを含め刺激的であり、この一年間は自分自身が持つアイデンティティを見直す機会ともなりました。

吉田八重乃

# 1人1プロジェクト リーダー制による 产学公NPO連携

教員名 杉岡秀紀



## 学修のねらい

地域経営演習III・IVでは、文献講読で専門の基礎を固めつつ、近隣の自治体・企業・NPO等と連携しながら、PBLに取り組みました。

文献輪読は、馬場健ほか『地方自治入門』と文部科学省・総務省『私たちが拓く日本の未来』の2冊を輪読。

PBLは、①5大学インゼミ（岩手県立大・神戸大・京都産業大・東北公益文科大・本学）、②高大社連携研修事業（京都中小企業家同友会）、③主権者教育プロジェクト（福知山JC・丹波市議会）、④高校生みらい会議（京都府北部地域連携都市圏形成推進協議会）、④地域プロジェクト（宮津クロスワークセンター）、⑤地域プロジェクト（舞鶴神崎KaDO）、⑥政策コンペ（大学コンソーシアム京都「京都から発信する政策研究交流大会」）、⑦政策コンペ（京都府警察「ポリス＆カレッジ」）などのプロジェクトを1人1プロジェクトリーダー制で進めました。ポリス＆カレッジでは優秀賞を受賞することができました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

私はゼミ活動を通して、「即興力」を身につけることができました。様々なプロジェクトで、即興で自身の考えを話す機会が多くありました。例を挙げると、高校生や議員との議論、多様な企業との対話、他大学の学生との交流などです。自身の考えを話す機会が多く、「即興力」を鍛えることが出来ました。また、話しながら考える整理や話の着地点を決めることもできるようになりました。これからも「即興力」を鍛えていきたいです。

高橋和樹

ゼミ活動を通して得た最大の学びは、大学を飛び出すことの大切さです。この1年間を振り返ると、本当に多くの方との出会いがありました。その中で、現場でしか得られない学びや気づきにも触れることができました。「地域”で”学ぶ・地域”を”学ぶ」ということの本質に触れ、地域課題に対し、より自分ごと化できたのではないかと感じます。ゼミを通して結ぶことのできたご縁を大切にしながら、今後も学び続けたいと思います。

後藤結衣

# グループ・ダイナミックスの立場から災害とその実践を考える

教員名 大門大朗



## 学修のねらい

本演習では、地域社会に大きな影響を与える「災害」がもたらす様々な課題について、社会学や社会心理学（グループ・ダイナミックス）の立場から実践的にアプローチできるようになることを目指しました。前学期では、まず、防災・減災に関する文献の輪読やミュージアムへの訪問を中心として、防災・減災に関する基礎知識を学び、災害がもたらす地域への影響や、災害情報や防災教育の批判的侧面について学びました。後学期からは、各自の関心に合わせて、福知山市内でのフィールドワークや質問紙調査、被災地におけるミュージアムの訪問などを通して、地域への影響について調査・情報収集、実践活動を行い、より具体的な災害や防災に関する理解を深めました。これらの地域での実践活動をもとに、グループ・ダイナミックスの立場から、事例や活動をまとめ、災害・防災がもたらす地域への意味について理解を深めました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

ゼミの活動では、荒木地区で行われた夜間避難訓練に参加した際に、避難訓練についてのアンケートの作成、分析等を行った事が印象に残っています。有効な情報を得るために、試行錯誤しながらアンケートを作成したことが大きな学びになりました。来年度は、得た情報を効果的に活用する為の分析方法を新たに考えながら、その結果を地域、社会にフィードバックしていく事に焦点を当て、ゼミ活動に取り組んでいきたいと考えています。

生野昌典

災害や防災について、防災教育という観点から分析しました。防災教育とは何か、そもそも防災はどのような成果を得られれば教育といえるのかなど、様々な視点から災害についてのアプローチを行いました。その一環として南陵中学校の一年生の皆様へのアンケート調査を実施し、災害についての関心や防災への意識などを調査しました。こうしたことから、日常生活から防災意識を持ち、日常と災害を切り離さないことの重要性を学ぶことができました。

糸井大樹

# プロジェクトマネジメント ～地域と協働しよう。小さな社会実験を試みよう。失敗から学ぼう。

教員名 谷口知弘



## 学修のねらい

谷口ゼミでは、多様な価値観を持った人々が機嫌よく暮らせるまちづくりを目指して実践的研究を行っています。2回生ゼミでは、まちづくりの理論と技法の基礎的な力を身につけるために演習と地域との協働実践を行いました。

前学期は、多様な主体が知恵を集めてまちづくりを進める技法「ワークショップ」の基本を講義と体験から学び、まちづくりの基礎知識と実践的技法を身につけました。後学期は、関心のテーマに集って2つチームを作り地域と協働するプロジェクトを実施しました。地域の関係者を巻き込んだ小さな社会実験を計画・実践し、実践力を身につけました。  
PJ1)想いを添えて物々交換で誰かにつなぐ「もったいな市場プロジェクト」  
PJ2)商店街の交流機能を再生する大学生×多世代の交流の場づくり「新町わんだープロジェクト」

これらの活動は「まちかどキャンパス吹風舎(ふくちしゃ)」を拠点に地域と関わり試みました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

1年間のゼミ活動を通して、プロトタイプ思考を身につけました。後学期は計3回の自分たちが企画した活動を開催しましたが、回を重ねるごとにレベルアップしていました。その要因は、別のもう一つのグループと毎回のゼミで活動報告を行い、自分たちの活動の目的を再確認したり、外部からの意見を積極的に取り入れたりしたうえで、まずは実践してみる精神を大切に活動の改善を繰り返していましたからだと考えます。

木下大生

1年間のゼミ活動で商店街の交流機能に着目して活動を行ってきました。商店街での多世代交流の場を作る活動の中で、試作をくり返して活動を振り返る大切さを学びました。自分たちで案を考えて何度もチャレンジすることで、毎回改善点や新たな発見がありました。時間をかけて活動に大きな進歩が見られたと思います。失敗を恐れてはじめの一歩がなかなか踏み出せませんでしたが、1年を通して多くのことに挑戦できたと思います。

吉森萌生

# 事例学習を通じて農村地域のサステイナビリティ（持続可能性）を考える

教員名 張明軍



## 学修のねらい

持続可能な農村地域社会の構築に関わる全てのステークホルダーの意識への理解を深めることができます。本研究室はそういった方々の意識に焦点を与え、質的及び量的調査を通じて、意識の実態、規定要因を解明し、地域づくりの推進に策を施し、課題解決に貢献することを目指します。京都府北部の三和町、伊根町と美山町に赴き、フィールドワークを通じて農村地域活性化のあり方への理解を深め、そのノウハウを習得します。既往研究レビューの仕方、論文の書き方、研究方法等を学びながら、各自の研究テーマ及び研究対象地域を徐々に決めていくことも目指しています。

## 学びから得たこと・身につけたこと

今年度は福知山市三和町大身地区の住民の意識調査や、伊根町、美山町などへのフィールドワークを行いました。

三和町大身地区では住民に大身地区での暮らしなどについてのアンケート調査を実施し、実際に自らの足で回収を行いました。また、伊根町や美山町へのフィールドワークは双方とも景観問題について考えることが多く、国内外問わず観光客が来る地域ならではの問題があり、対策を講じていかなければなりません。

由利虎太郎

今年度は、福知山市三和町大身地区の住民意識調査を行いました。多くの住民から調査票を回収することができました。住民の方のお話を聞くことができ、大身地区の住民意識を知ることができます。また、中丹イチオシ商品の実食会も行いました。地域ならではの商品を発信していくことで地域活性化につながると感じました。そして、伊根町と美山町へのフィールドワークも行いました。オーバーツーリズムという問題を解消する必要があると感じました。

谷内直輝

# 交流観光等による 多自然圏(非大都市圏)の 地域活性化

教員名 中尾誠二



## 学修のねらい

- 4/29-30 福知山市三和町の古民家宿「旅籠あぶらや」  
7/7-8 同市三和町の「農家民泊さかや」  
12/12-13 同市夜久野町の「大畠公民館&テント」  
11/7-8 豊岡市の古民家一棟貸宿「Kazabi～風日～」  
では当研究室2回生7人(後期～8人)が「宿泊」しながら参与観察調査を行いました。  
10/27-28 京丹後の古民家宿「オキニコウ」での交流民泊連携協議に1人が参加  
11/25-26 南丹市の「農山村民宿はなぶさ」に1人が4回生1人+早大生1人と宿泊  
12/16-17 新温泉町の「田舎移住体験施設」に1人が3回生1人と宿泊  
以下イベント等にも「日帰り」参加しました。  
7/17 福知山環境会議の由良川SUP体験に6人  
8/5・11 福知山市大江町でのTrailRunに3人  
12/3 新温泉町ローカルクエスト現地調査に2人  
12/20 宮津市の天橋立一斉清掃に全員

## 学びから得たこと・身につけたこと

1年間の活動の中で、京都府北部地域や兵庫県豊岡市但東町など福知山市周辺の地域にてフィールドワークを行い、聞き取り調査は難しいものであります。現地の人との関わりの中で多くのことを学ぶことができました。今年度はメンバー全員での活動が多くたのですが、来年度からはそれぞれの研究テーマについての活動等、個別での活動も増えてくると思うので、今年度に学んだことを活かしながら、個人の活動も有意義なものにしていきたいです。

有賀溪粹

1年間の活動を終えた今、多くの地域に足を運び幅広い活動を行った今年度は、自分にとって非常に刺激的だったと感じています。古民家での宿泊調査やイベント等での聞き取り調査では、会話の中から重要な点を見つけだし、そこを深掘りする力を身に付けることができました。但東町の空き家に関する活動では、地域の方と継続的に意見交換をさせていただき、貴重な経験を積むことができました。来年度は、より自発的な活動に力を入れたいです。

渡部夢生

- ①高校における「総合的な学習」と「探究活動」の比較
- ②不登校問題に対するフリースクールの在り方について
- ③日本の教職員の労働環境と、海外事例・国内民間事例との比較
- ④中国における教育制度の現状と課題
- ⑤知的障害を持つ児童へのICT技術活用の可能性
- ⑥福知山市における教員の働き方改革について
- ⑦LGBTQ+に関する知識の普及をいかにして教育で行うか

教員名 福島真治



## 学修のねらい

学校経営に焦点を当て、その概要や特質・直面している課題などを、主に文献調査を中心に学習します。加えて、教育関係者と直接対話する機会を設け、教育機関・学校組織の現状について包括的に理解していくことを目指します。そして、その中で得られた知見・課題を、実際の社会にどのように活かすのか、それを考えるための基盤を構築することが、このゼミの目的です。

具体的な取り組みは、以下の通りです。

- ・前学期は、「教育行政」「学校経営」などに関して、書籍や論文を中心で学習しました。
- ・後学期では、上記学習から学生が自身の関心に合わせて個別のテーマ(上記7つ)を設定し、それに関する先行研究の整理・フィールド調査などを実施し、その成果をレポート・ポスターにまとめました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

前半期では、日本の教育の現状や問題点などについて座学で学び、それを踏まえて、後半期では個人個人で興味のある分野について深掘りしました。私はLGBTQ+について以前から興味関心があったため、先行研究を調べたり、さばえダイバーシティーパレードに参加したりしました。これらによって、LGBTQ+に関する日本の教育の問題点を見出し、性の多様性が認められる社会を作るための教育の在り方について考えました。

松山友子

前半期では、座学中心で教員の労働環境の実態や教育制度などを学び、皆で議論しながら、自分の関心のある分野を探求しました。後半期は、海外の教育と日本の教育の違いに関心を持ったので、まずは中国の教育の実態について研究しました。中国の学力の高さとその成長速度は素晴らしいのですが、都市部と農村部での大きな格差などの問題も見られました。今後は、諸外国の研究者による中国研究を中心に調べていきます。

前田紘玖

# 北近畿全域の医療・介護・福祉の資源を持続可能とするためには何が必要か

教員名 星雅丈



## 学修のねらい

当2年ゼミでは、例年、アカデミックスキルのさらなる向上を目指して医療情報・病院経営にかかる文献抄読会を実施するのと同時に、データを収集し処理する技術と経験を積むために、電子化されていないデータを手入力で作成する作業を行っています。抄読会では「病院原価計算」を取り上げ、医療に対する複雑系としてのアプローチについて学修しました。研究活動では、北近畿地域の医療・介護・福祉の施設・従業員数の全数データ収集を行い、同地域において物的・人的資源の現状を分析しています。学生はこの演習で、データが思い通りの状態で公開されていないこと、手間をかけて処理をしなければ分析などに使うことができないことを学修しました。なお、12月には大阪市内に所在する病院の見学を行うとともに、近畿病歴管理セミナーの未来プロジェクトにおいて「北近畿における医療介護機関・専門職人員のデータ収集とその分析結果」と題して研究成果を発表しました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

病院見学では、これまで授業などで学んでいた病院内の仕組みや実際の事務の仕事内容、仕事環境を見学することで目指す将来について明確に考えるようになりました。研究活動では、官公庁の公開データや施設のWebサイトを探索して、北近畿地域における医療機関・介護施設・専門職養成施設の全数調査、および専門職員数を調査しています。このような地道な作業を行うことが利用しやすいデータにつながることを実感できました。

学生A

地域経営演習IIIでは病院原価計算について学ぶことができました。病院における質とはなにか、また、これからの病院の質を高めていくためにはどのようなことが必要であるのか、現在の病院が抱えている問題などを考えるきっかけになりました。地域経営演習IVでは病院見学を通して、実際に病院で働いている人達を見て、今、自分たちがしている学習が将来どのように繋がるのかを具体的に知ることができました。

学生B

地域経営研究Ⅰ・Ⅱ



# 地域課題の発見と 解決策の検討

—ゼミ生全員でひとつの研究課題に取り組む—

教員名 大谷杏



## 学修のねらい

3年生のゼミでは、学生自らが主に北近畿地域が抱える問題について考え、ゼミ単位でひとつの研究課題に取り組みます。今年も学生が主体となり、役割分担を決め、綿密な計画を立て、文献調査と共に、現地を訪問し、伊根町観光協会さんへのインタビュー調査を実施しました。その成果を「地域における高付加価値旅行の提案-京都府伊根町のオーバーツーリズム対策-」と題した論文にし、12月に龍谷大学深草キャンパスで行われた大学コンソーシアム京都主催「京都から発信する政策研究交流大会」で発表しました。内容は、観光客の急増により今後懸念される人手不足に対応するために、客単価を上げて観光客数を抑える高付加価値旅行の提案でした。また1月には、研究テーマの設定や調査設計訓練の第2弾として、学生自身が計画を立て、広島平和記念資料館等へのフィールドワークも実施しました。いずれにおいても、ゼミ生が時間をかけて協力し合った一年でした。

### 学びから得たこと・身につけたこと

今年度は、「京都から発信する政策研究交流大会」に向けて伊根町のオーバーツーリズムに着目し、研究を行いました。現地調査等を通じて、地域における観光は、都市部とは異なり、その地域らしさを追求した体験に高い価値がつくと感じました。観光公害に対しても、地域の観光の特徴に合わせた解決策を考えることが重要であると学びました。ゼミ全体で協力し、試行錯誤して研究を行った経験から、組織の見直しや運営方法の改善につなげたいと思います。

目次

私は大谷ゼミで1年間様々なことを学びました。伊根町のフィールドワークでは伊根町の様々な地域課題を見つけることができました。特に地域の人の実際の声を聞けたことは、インターネットだけでは分からぬ問題が数多く存在するということを私に改めて実感させ、地域問題を解決するためには実際に現地に行くことがとても重要であると感じました。他にも様々な学びを大谷ゼミで得ることができ、地域課題についての理解が深まると感じました。

武田知之

# DWH(データウェアハウス)ゼミ

教員名 | 岡本悦司



掌修のねらい

2年生の地域経営演習では、教官が病院データをデータウェアハウスに加工して提供しましたが、本ゼミでは学生が任意に選択した公開データ(必ずしも医療データに限定しない)について自らデータウェアハウス化を行う技術を習得します。

データウェアハウスとは、Excel上でピボットテーブルで操作できる形態であり、ネット上で公開された夥しい統計表の大半はそのままでは操作できません。膨大なデータをネット(e-stat等)からダウンロードし、それをキューブ形式に加工することは一定の技術を必要としますが、本ゼミはそうした技術をマスターしたデータウェアハウス育成を目指します。

## 学びから得たこと・身につけたこと

私がこのゼミで学んだことは、都道府県や病院などから提供されているデータは不完全なものが多く、そのまま活用することが困難であるということです。活用の方法や目的によって提供されているデータを加工する必要があり、その1つとしてデータウェアハウス化が有効なツールであることを学びました。データウェアハウス化へ至るまでのキューブ化・正規化などのスキルを身につけました。

版面设计

学びとなった事・身につけたことは、e-statで公表された医療施設調査データや厚生局のデータを加工しデータウェアハウス化することです。主に取組んだ事としては、電子処方せん利用参加医療機関・薬局リストデータを活用し、各都道府県の導入率を出すことで、医療DX化の現状について調査することです。次年度では、卒業制作に取り掛かるので、今まで制作したものよりも濃く厚みのあるものにしたいと思います。

前嶋亮汰

# キャリアパスを意識した能力開発

教員名 加藤好雄



## 学修のねらい

本演習では、受講生は資格取得と実践的な学習経験を通じて、キャリアパスを意識した能力開発を目指します。具体的には、TOEIC、ITパスポート、簿記2級等の資格取得に向けた学習を行うことで、実務に必要な言語能力と基礎的なIT及び会計スキルを修得します。また、マーケティングカンファレンス2023への参加・報告を目指して、報告テーマを「インバウンド×京都」に設定して、口コミ評価や文献レビューを通じて観光地と外国人旅行客の相互作用、特に顧客体験（カスタマーエクスペリエンス）についての理解を深めました。最終的には、マーケティングカンファレンス2023において、「観光客の口コミ評価における顧客体験の影響」の論題でポスターセッションによる報告を行っています。

## 学びから得たこと・身につけたこと

私は、会計を専門にした大学院への進学を考えているため、日照簿記1級の資格取得を目指しました。また、大学院入試の対策として「企業価値経営」をテキストに使用し、EVA/バリエーションやM&A、無形資産の価値評価に関する卒業論文のテーマを探求しました。この経験は私の専門知識を深め、将来のキャリアに大きく貢献するものとなりました。

石川立

3年次のゼミでは、マーケティングカンファレンスへの参加・報告に専念しました。「インバウンド×京都」をテーマにして研究を行い、口コミ評価と文献レビューを基にした分析から顧客体験への理解を深めました。カンファレンスでの報告は私にとって大きな挑戦でしたが、プレゼンテーション能力の向上や専門知識の修得に繋がったと感じています。この経験で得た学びを次年度の卒業研究に活かしたいと考えています。

渡邊梨生

# 企業活動と社会課題 —イノベーションとデザイン思考の観点から—

教員名 亀井省吾



## 学修のねらい

地域経営研究I・IIでは、イノベーションと社会課題の関係性について、現場フィールドワークのほか、経営者やマネージャーとのディスカッションから実践的に学ぶことを目的にしています。地域経営研究Iでは、地域発のグローバル企業を実証事例として「研究開発における探索誘因とシグネチャプロセス」について考察しました。なお、その成果は、情報社会学会2023年次研究発表大会WIP部門にて発表し、学会ホームページにWIP論文として記載されています。地域経営研究IIでは、業界第一線で活躍するデザイナーをゲスト招聘しデザイン思考について学び、卒業研究に向けたテーマ設定を行っています。

## 学びから得たこと・身につけたこと

ゼミ活動を通じて、学問的な探求と実践的な経験の両方において、顕著な成長を遂げられたと感じています。前学期は、学会論文の作成と発表の過程にて、修得知識の深化と、チームワーク向上、ロジカルな思考を磨くことが出来ました。後学期では、デザイン思考講義を通して、「自らの問い」について深く考える機会が得られました。これらの経験は、就職活動や卒業論文に取り組む上で、大きな影響を与える貴重なものだったと感じています。

宇苗 隼

ゼミ活動を通じて、論理的思考力と協調性、問い合わせを立てる力を養うことが出来たと考えます。学会論文執筆から発表までの過程では、企業の持続可能性に関して先行研究から学んだ新たな可能性をチームで実証研究してきました。後学期におけるデザイン思考講義では、日常に潜む「問い合わせ」について考え、自らの問い合わせを立てる機会を得ました。ここで立てた問い合わせを、ゼミを通して培った論理的思考力を用いて卒業論文として形にしていきたいです。

平田 翔大

# 人口減少社会の 福祉的課題を知り 北欧の福祉から 課題解決のヒントを学ぼう！

教員名 川島典子



## 学修のねらい

今年度は、普通列車で鳥取迄行き北近畿の中山間地域における交通渋滞や福祉アクセスの悪さを把握し、その他の福祉施設も見学した上で、人口減少社会の福祉課題をどう解決するのかを地域経営の視座から考えました。その際、北欧の福祉の事例からヒントを得る事を学修の狙いとしました。人口減少の課題を克服した明石市の事例研究にも行っています。更に、輪読を行い、各自のテーマに沿った本を読むことによって卒論執筆にも備えました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

今年のゼミでは、鳥取迄普通列車で行ったり、福知山市の介護施設「グリーンビラ夜久野」や明石市子育て支援センターにフィールドワークに行きました。実際に施設の様子を見学し、職員の方の話を聞くことで福祉の学びを深めることができたと思います。又、バンク・ミケルセン記念財団理事長の千葉忠夫さんの話を聞く機会があり、デンマークの福祉についても学びました。輪読や、各自で選んだテーマの発表からは、卒論の書き方を学習することもできました。

磯崎新太

フィールドワークに頻繁に行き、福祉施設等を見学して職員さんのお話を聞く機会に恵まれました。実際に自分で見たり聞いたりすることによって知識がより深まるだけでなく、コミュニケーションの重要性や個人を尊重することの大切さなど多くの学びを得ることができました。デンマークの福祉についても学びましたが、日本の医療福祉に活かしていかなければと思いました。この経験を今後の自分の生活に役立てていきたいです。

仁木杏

# 地域資料の発掘から 調査に至る実践的研究

教員名 小山元孝



## 学修のねらい

福知山市文化・スポーツ振興課との共同研究という形で、市所蔵の明治時代から昭和30年代にかけての公文書整理を行いました。具体的な作業は、文書を年代順に配列し番号を付した整理ラベルを貼付しました。その後、中性紙保存箱に10点ずつ程度に収納し、箱には町村役場名と番号を記したラベルを貼付し、一部はデジタルカメラによる撮影を行いました。本調査を通じて貴重な資料の取り扱い方、また保存方法について学ぶと共に、作業の進捗管理や報告などプロジェクトを実践する手法についても考えるものとなりました。

さらに本調査で得られた知見をもとに、「ロビーで文化財 花の都・京都で福知山踊り」と題した小展示を福知山市立図書館中央館で開催しました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

三重県伊勢市への調査合宿や京丹後市での「こまねこまつり」に運営側で参加するなど、様々なイベントがありました。そこで準備の大切さについて一番考えさせられました。いつアボを取ればスムーズに進めることができるのか、どのような順番で行えばよいのか、実際に物事を行うまでに見直さないといけないことが多いありました。他にも代案や緊急時の対応を考えるなど、活動を通して得られるものが多くあった一年でした。

矢口唯人

昨年の夏に福知山市の公文書整理を行いました。主に明治時代から昭和30年代にかけての公文書をラベリングしていく作業をしました。なかには公文書の状態が悪いものもあり、丁寧に扱いながらも作業効率を維持する大変さを学びました。他にも公文書の中には震災に関連するものもあり、当時の状況を知る貴重な資料で公文書を保管する意義を体感し学びました。

和田創太

# 観光地域づくりを巡る諸問題を考える

教員名 佐藤充



## 学修のねらい

本演習は、卒業研究の成果物(論文)を作成するために、学術研究のデザインとプロセスを理解し、自らの問題意識に立脚した研究計画の策定とその実施が目的でした。

一年間を通して、各学生に、研究デザインに関する文献を読ませ、主に観光地域づくりに関する問題意識に基づいて、先行研究のサーベイや既往調査のデータの収集・分析に取り組んでもらいました。本演習で重視したのは、それぞれの学生の問題関心に寄り添って、「学術上の問い合わせ」を導き出すことでした。

地域協働の観点からは、フィールドワークにおいて、京丹後の夕日ヶ浦観光協会と伊根町の観光関連事業者と連携したプロジェクトを実施しました。2・3回生の合同チームを作り、地域住民と観光客向けのイベント参加、地域住民向けの意識調査の集計・分析、公式SNSを活用したデジタルマーケティング、観光者向けのお土産づくりを行いました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

伊根町のお土産づくりでは、一から商品を考えることの難しさを知りました。どのようなデザインにしたら良いのか、紙質、販売数量、価格、商品の置く場所など、細かい部分まで事業者の方と話し合うことで、モノを販売することの難しさと奥深さを感じました。普段は消費をする側なので、どうしたら手に取ってもらえるか、どのような人がターゲットになっているのかを考えることが、新しい視点になって学びになったと思います。

五十嵐麻衣

今年度のゼミでは、夕日ヶ浦でのイベント参加、住民意識調査の結果報告、卒業研究に向けた個人研究を行いました。イベントでは、砂浜に灯りを並べていく必要があったのですが、砂浜に入ってくる観光客の方への説明や日が沈む前に並べなければならない状況でイベント運営の難しさを学びました。卒業研究に向けた活動では、複数の先行研究から理論の理解を深めたり、データの分析方法を学んだりして、卒業研究の準備を行うことができました。

清吉琉加

# 問題意識にそった研究計画をたて、遂行する

教員名 佐藤恵



## 学修のねらい

2年目の学生であることから、1年目の学修で身に着けた考え方や知識をもとにした演習に取り組ませました。学修の狙いは、自ら考え、自ら行動し、自らそれらを発信していく力の醸成です。

学生は、日常生活などから自ら問題点を見出し、テーマを決めました。その後、それらを解決するための方法を提案し、実行に移しました。具体的には、社会調査法にのっとったアンケート調査です。得られたデータのクレンジングと、分析に着手するところまで到達しています。私は、適宜それに助言し、支援するにとどめました。後輩ゼミ生の研究支援のために、比叡山と和歌山県広川町に出向きました。1年間を通じて統計学の輪読会と、時事問題に基づく議論を行いました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

個人の主な活動は、研究計画の作成、アンケート調査の準備と実施と収集データの分析でした。調査依頼文や質問紙の作成など、文章を簡潔にまとめるのに苦労しました。

ゼミ全体では、統計学の参考書の輪読会や新聞記事をもとにした議論が行われました。質問する力や説明する力が養われました。これらは今後の活動で必要となる力であるため、4年次でも積極的に取り組みたいです。

佐藤葉瑠香

# 多様性のある社会について考える：異文化理解の視点から

教員名 渋谷節子



## 学修のねらい

文献購読及びディスカッションと地域でのフィールドワークにおける実践、個別研究を通して、文化・社会の多様性について異文化理解の視点から考え、自らの研究を通して多様性のある社会作りについて、その難しさや課題も含めて考察を行います。具体的には、①異文化理解を実践し、文化・社会の多様性について考えるフィールドワーク、②バックボーンとなる異文化理解や文化・社会の多様性に関する文献購読、③文化・社会の多様性について自ら関心があるテーマの個別研究の3つを行い、日本や世界の多様な文化を学びながら、地域の外国人留学生との共同学習等を通して異文化理解の難しさや多文化社会の課題と解決策について自ら考える力を育てます。より豊かな地域社会を作る上で文化・社会の多様性がいかなる役割を果たすのか、多様性のある社会を実現する上での課題は何か、どのように課題を乗り越えていくことができるかを、理論と実践の両面から考えます。

## 学びから得たこと・身につけたこと

3年生になってから文献購読の内容が深くなりました。ニュースなどで話題になるジェンダー・ナショナリズムの動き、他にも身近な所で消費される異文化という印象について意見を交換することができました。自分の文化やアイデンティティを守ったり残していくとする動きは日本では体感することが難しく、その動きの多くは欧米などの多民族が多く暮らす地域から発信されます。そのことを同じ学生の研究テーマから知ることができるために、ゼミ生の研究テーマはどれも興味深いです。

棕平玲香

異文化理解をテーマに教材を使って学習し、ゼミのメンバーで多様な視点から考察しました。日常のどの場面を切り取っても異文化が混ざり合っており、理解を深めることの重要性を学びました。また、地域の日本語学校の方々と共に学習し、グループごとに現地に赴くなどの調査研究を行い、全体発表をしました。個人研究では「同調圧力」や「若者の貧困」に関して、文化・宗教から受ける影響や違い、制度や成り立ちの理解を深めました。

菊池保乃加

# 文理融合型経営学の深化

教員名 鄭年皓



## 学修のねらい

本演習では、「地域経営演習Ⅲ・Ⅳ」の延長線で、「文理融合型経営学」の知識を深めています。「地域経営研究Ⅰ」では、経営戦略・ビジネスモデル・マーケティング・経営組織論等といった問題に対して、関連した専門書や論文を読むとともに、多変量解析の諸アプローチやマルコフ連鎖のような計量的分析を学習しています。「地域経営研究Ⅱ」では、前学期の内容を深化させた内容を学習しています。これにより、豊かな発想力と鋭い分析力を兼ね備えた文理融合型人材の育成をめざした教育活動を展開しています。

## 学びから得たこと・身につけたこと

ゼミでは、主成分分析やコンジョイント分析、マルコフ連鎖などの分析や数理的なモデルについて多く学びました。授業や課題を通して理論を深めたり分析を行ったりするだけでなく、学んだ理論が用いられている研究レポートを見ることで、来年度からの地域経営研究の参考になりました。また、卒業論文のテーマや構成について、先生やゼミ生同士でフィードバックすることができました。来年度もみんなで協力しながら、ゼミ活動を行いたいです。

羽尻 一稀

2年次から発展した数量化理論一類を始めとする、様々な分析手法を学びました。実生活や社会に出て活かすことができる分析やその考え方について理解しました。学んだ分析が直接使える場面があるかはまだ不透明ですが、物事の本質の捉え方や、結果に導く過程など、私が苦手としていた力を培いました。また、ゼミの仲間と協力して課題に立ち向かった経験から、一人ではなく複数人で解決する力も身に付けました。

佐々木 大志

# 1人1プロジェクト リーダー制による 産学公NPO連携

教員名 杉岡秀紀



## 学修のねらい

地域経営研究Ⅰ・Ⅱでは、文献講読で専門の基礎を固めつつ、近隣の自治体・企業・NPO等と連携しながら、PBLに取り組みました。

文献輪読は、秋吉貴雄の『入門公共政策』と村田和代の『優しいコミュニケーション』、十六総合研究所の『これからの地域公共交通』の3冊を輪読しました。

PBLは、①5大学インゼミ（岩手県立大・神戸大・京都産業大・東北公益分科大・本学）、②高大社連携研修事業（京都中小企業家同友会）、③高校生みらい会議（京都府北部地域連携都市圏形成推進協議会）、⑤地域プロジェクト（京丹後市網野町舎跡地活用）、⑥学会発表・政策コンペ（日本地域政策学会、産学連携学会、京都から発信する政策研究交流大会、ボリス&カレッジ）、⑦全国公立大学生大会（LINKtopos）などのプロジェクトを1人1プロジェクトリーダー制で進めました。

「京都から発信する政策研究交流大会」では優秀賞を受賞することができました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

全国の公立大学生の交流を目的とした"LINKtopos2023"の運営副代表として半年以上活動しました。大変なことも多々ありましたが、イベント当日、参加者同士が楽しそうに交流する様子をみたり、参加者から「参加してよかった。来年も参加したい。」という言葉を直接いただけたことによって、頑張ってきてよかったと感じました。活動で得た経験や繋がりは今後に活かしていきたいと思います。

富江美有

ゼミ活動を通して、北近畿の高校生や地域住民、企業家など、様々な人々と交流し、関係を構築することができました。立場の異なる参加者が混在する中で議論を進行することは大変でしたが、その経験から、自分と異なる視点や考え方を持つ人と話すことで、議論はより深まるということが学べました。何より、2年間「中小企業家同友会」を担当したことで、連携企業をはじめ、様々な企業と経営者の魅力を知れたことが、最大の成果です。

中村心

# プロジェクトマネジメント ～地域と協働しよう。小さな社会実験からモデルを創ろう。

教員名 谷口知弘



## 学修のねらい

本演習では、チームで問題発見から解決に至る協働型デザインプロセスを企画・運営しプロジェクトマネジメントやファシリテーションの実践能力を身につけます。

前学期は、2年間取り組むテーマ探索とチームづくりを行い、2つのプロジェクトが始動しました。後学期は、フィールドでの活動を中心に進め、前学期に計画した協働型アクティビティを実践・評価し、実践と理論・政策との架橋を試みました。

PJ1) 大学生と地域の交流機会を作り大学生のウェルビーイングを高め、卒業後に関係人口創出を目指す「心地よいひとときのお茶会【結】プロジェクト」

PJ2) 日本酒文化の継承により地域の持続可能性を高めたいと若者と日本酒の繋がりづくりに取り組む「若者酒づくりプロジェクト」

これらの活動は「まちかどキャンパス吹風舎(ふくちしゃ)」を拠点に地域と関わり試みました。

## 学びから得たこと・身につけたこと

今年度は、日本酒チャレンジの会や若宮酒造での酒造り、福知山ワンドーマーケットでのカクテル販売などを通じて、日本酒離れの叫ばれる若者へ、日本酒文化を広げるために活動してきました。はじめは日本酒に関わることも少なく、全く興味のない状態でしたが、酒蔵訪問や生産者の方のお話を通し、日本酒に親しみがわくようになりました。今後は、私が日本酒に興味を持ったように、多くの若者に日本酒について興味、関心を持ってもらいたいです。

平川静恭

今年度、私は「大学生×地域の交流」をテーマに活動に取り組みました。その活動を通じて「交流の場づくりの難しさ」を再認識しました。交流機会を作ることは容易ですが、そこでの交流のしやすさは場づくりの仕方によって大きく異なります。そのため、ただ機会を提供するのではなく、ニーズを把握した上で場づくりをする必要があると学びました。

また、活動で試行錯誤し、実践を重ねていくうちに、何事にも臨機応变に対応する柔軟性が身につきました。

高木春菜

# 農村地域のサステナビリティ (持続可能性)に関する 多様な研究

教員名 張明軍



## 学修のねらい

持続可能な農村地域社会の構築に関わる全てのステークホルダーの意識への理解を深めることができます。本研究室はそういった方々の意識に焦点を与え、質的及び量的調査を通じて、意識の実態、規定要因を解明し、地域づくりの推進に策を施し、課題解決に貢献することを目指します。本演習の主要目的は研究方法の習得です。研究活動を通じて、仮説の検証方法、アンケート調査票の作り方、統計データ分析などを学習し、今後各ゼミ生の卒業研究に必要なノウハウを身につけてもらいます。更に、実験調査の結果の論文化を図ります。

## 学びから得たこと・身につけたこと

地方の観光において、住民のステークホルダーとしての当事者意識向上に向けた取り組みが必要です。美山町では訪日客が多数訪れます、観光消費額が小さい課題がありました。そこから着想を得て、ガイドツアーにおける訪日客のサービス満足度向上に向けて、満足度とガイドの外国人受容意識の関係、また、受容意識の規定要因について、自身の研究テーマを定めることができました。

中澤拓海

個人としての活動では、卒業研究に向けた文献調査を行いました。卒業研究のテーマを決めるために様々な文献を読み、テーマを決めることが出来て良かったです。今後も文献を読むことになるので、テキストマイニングと呼ばれる調査方法も活用して理解を深めていきたいと考えます。そして、良い卒業論文を執筆するためにも、来年度はさらに力を入れて取り組んで行きたいと考えます。

沼田智貴

# 交流観光等による 多自然圏(非大都市圏)の 地域活性化

教員名 中尾誠二



## 学修のねらい

前学期は、当研究室3回生8人(概ね)全員での「宿泊を伴ったフィールドワーク等」実施により「現地を訪問して行う聞き取り調査」能力の向上を図りました。

後学期は、各自が設定した研究を進める(手法:文献調査・参与観察・聞き取り調査)ことで進路への動機付け深化を狙いました。研究テーマは以下の通りです。

- 1.新垣大翔 ウォーターレジャー・スポーツを活用した地域振興とその安全管理
- 2.北田真穂 伝統産業がもたらす地域活性効果
- 3.杉原篤 空き家活用が地域経済や地域の豊かさに与える影響
- 4.富松はる恵 婚活における地域活性化の可能性
- 5.中村友彌 地域ブランディングによる地域活性化
- 6.新名美賀 城崎温泉における浴衣の着用体験・体験型観光による町おこし
- 7.平井未憂 自治体における公務員の副業と民間副業人材の活用
- 8.吉見光洋 ストリートミュージックから生まれる地域コミュニティとその活性化

## 学びから得たこと・身につけたこと

今年度は、前年度よりもコロナ対策が完全に緩和され積極的にフィールドワークを行うことができました。学生のみで調査に行く機会も増えたためアボ取りから聞き取り調査まで自分で行える実力が身についたと感じました。後学期からは、卒業研究のテーマを各自で設定し現地調査を行いました。多自然圏地域での海・川を活用したスポーツ地域振興とその安全管理に焦点を当て調査し、学びを得ました。卒業論文制作に向けてさらに調査を深めていきたいです。

新垣大翔

今年度は卒業研究のテーマを定め、各自そのテーマに向けて調査を行い、発表し合いながらメンバー内で知見を深めました。また、昨年度と比べ、学生のみや単独の調査が増えたことで、自身の調査に対する意識が高まり、それに伴い能力不足な点や改善すべき点を認識することができました。今後研究を進める上で、今年度見付けた改善点や、各メンバーの卒業研究を通じて知見を広げ、更に充実したものにしていきたいです。

富松はる恵

- ①高校生におけるソーシャルスキルトレーニングの有用性について
- ②通信制高校における学習・進路指導の在り方～公立通信制高校と地方私立通信制高校との比較～
- ③他のスポーツ指導法を基にした児童生徒へのより良い剣道指導法の提案

教員名 福島真治



#### 学修のねらい

学校経営を主軸しながら、「地域との連携」「チームとしての学校」にまで射程を広げ、その概要や特質・直面している課題などを学習した上で、実際に自身の関心に合わせたテーマを設定し、文献／実地調査を行います。そして、その結果を基に、実際に教育を軸に地域社会を活性化していくための条件を探ることが、このゼミの目的です。

具体的な取り組みは、以下の通りです。

・「教育行財政」「学校経営」に加え、自身のテーマに関して、主に論文での学習を進めました。

・上記テーマ①では、今後高校生が求められる重要なスキルとしてソーシャルスキルを挙げ、そのトレーニング手法等についての文献調査、②では、通信制高校教員へのインタビュー調査を軸に、通信制高校が行う学習・進路支援の状況やあり方の検討、③では、児童生徒へのスポーツ指導法に関する研究を整理しながら、剣道指導法に活かすアプローチの検討を行いました。

#### 学びから得たこと・身につけたこと

通信制高校での生徒の生活に興味を持ち、複数の高校へインタビュー調査をする中で、全日制で馴染めなかった生徒への受け皿として機能している一方、「切符の買い方がわからない」といった一般的な社会常識を知らない生徒が在籍していることが判明しました。3回生では、そうした生徒への教育や学習環境について、追加調査を行う中で、現場の声や制度の限界といった、「現実」と向き合うことの難しさを気付かされました。

原口 祐貴

私は、前学期で教育政策・学校経営の基本的な知識を学び、後学期では「小中学生の剣道における指導方針の特徴」という研究テーマを設定し文献調査を行いました。剣道指導とスポーツ指導の相違点や、従来の剣道指導の改善点などを学び得ることができました。また、子どものやる気を引き出す指導法などを身につけることができました。今後は剣道指導者へアンケート調査を行い、より良い剣道指導方針を確立していきます。

廣山 航太

## 医療機関データの横断的分析を可能とする病院統合マスタの構築、名桜大学との交流

教員名 星雅丈



#### 学修のねらい

当ゼミでは例年11月に沖縄研修を実施しており、名桜大学との研究交流会は2018年から既に6回目です。今回は当ゼミ生と名桜大学2・3年生による混合の4グループによるワークを行いました。テーマはLTD (Learning Through Discussion)による文献精読でした。文献『人類と病』の1つの章をグループ全員で読み込み、医学・医療用語、筆者の主張、文献の記載内容についてグループで話し合いつつ理解を深める方法です。論文などアカデミックな文書を書く(writing)ために読む(reading)ことは重要であり、そこに視点を定めたワーク、そして他学との接点が少ない本学の学生にとって、他大学の同じ目標を持つ学生との真剣な議論は新鮮な経験をもたらしたと考えます。なお、研究活動としては、医療機関データの横断的分析を可能とする病院統合マスタの作成を、昨年度から継続して行っています。

#### 学びから得たこと・身につけたこと

研究活動として、様々な公開されているデータを接続するための病院マスタを作成しています。そこで何万件という大量データをAccessによって処理する技術を身につけることや、病院が統合・廃院など年々変化している実態を知ることができました。沖縄研修の名桜大学生とのグループワークでは、初めて出会う学生の方々と一つの課題について考え、発表しました。この経験からグループワークの流れなどを学ぶことができました。

学生A

沖縄研修では、名桜大学の学生との交流で、これまで経験のなかった文献精読の方法や同じ診療情報管理士を目指す学生の異なる視点からの考えを知ることができました。去年から引き続き取り組んだ研究「病院統合マスタの作成」では、Accessによる大量データ処理を経験でき、また病院の追跡調査で、病院ごとに情報公開の度合いに違いがあると知ることができました。数の多いデータの処理は大変でしたが、やりがいのあるものでした。

学生B

## 地域情報の収集とその表現

教員名 山田篤



#### 学修のねらい

地域には其処に固有の様々な情報が存在します。地域課題を解決する際には、其れ等を境界条件として組み込まなければ適切な解は得られません。即ち、全国一律に適用できるような解決策は成立し難く、その地域の特性に合わせて考えなければなりません。そのためには、課題を考えるに当たって考慮すべき要素を特定し、そのために必要な情報を収集する必要があります。更に、収集した情報を分析するためには適切に表現する必要があります。

この演習では、夫々の地域にどのような課題が存在し、その解決のためにどのような情報を収集すればよいかを考え、其れ等を適切に表現する方法を身につけることを目的としています。

前学期は、事例研究として、機械翻訳や音声合成、更にはGISを用いて様々な地域情報を表現する方法について検討を行いました。後学期には、各自が設定した課題について、実際に情報を収集し考察を行いました。

#### 学びから得たこと・身につけたこと

それぞれ違う関心・テーマを持つゼミ生の研究内容について質疑応答をする中で、多様な分野について考えを持つことができました。また、研究の途中経過をゼミ内で共有することで、自分1人では気づけなかった疑問点や、新鮮で新たな視点からの意見を取り入れることで、より意欲的にテーマの研究に臨むことができました。多様な視点を取り入れながら物事に取り組む大切さを学びました。

大井淳平

論文を読んで内容を理解することは出来ても、得た情報を自身の主張したいことにどのように繋げていくかが難しかったです。自分の触れたことのない分野の論文を参考にする時にある程度の知識が必要になってくるので、その調べ方なども研究をしていく中で分かっていました。ふとした時に良い案が浮かぶこともあったので、余裕を持って卒業論文の執筆をしていきたいです。

吉田琉生

## 卒業研究Ⅰ・Ⅱ テーマ一覧

ゼミ担当教員	卒業研究テーマ	学生氏名	ゼミ担当教員	卒業研究テーマ	学生氏名
井上直樹	地方銀行の非金融サービスが地域経済に与える影響～関西地域を事例として～ 人生100年時代を生き抜くための資産形成～社会保険の被保険者別ライフプランの考察～	小谷川 晟 山田 圭一郎	鄭 年皓	外国につながる高校生への包括的支援～地域におけるより良い支援の提案～ 恋愛依存と親子関係の関連性	匿名希望 前田 紗良
大谷 杏	食文化の浸透は異文化理解に有効か 学校と地域が連携した取組～丹波市における実施状況調査から～ 復活した和紙の事例をもとに考える伝統的工芸品の文化技術継承について 演劇祭による地域活性の必要性とその効果～兵庫県豊岡市の事例から～ コスプレイベントによる地域活性化～滋賀県大津市の事例から～ 映画館と地域～学生から親しまれる映画館となるために～ 過疎地域における公共交通のあり方～京都府丹後地方を例に～ 食品ロスの削減に効果的な取り組みとは～大学生をターゲットにした考察～	安部 弥津希 加賀山 光喜 徳平 萌香 仲義 ゆめ 匿名希望 堀江 世那 松村 洋希 渡邊 瑞稀	杉岡秀紀	オンライン・ゲームにおける課金行動に関する研究 買い物弱者の実態と支援方法に関する研究 農泊の消費者属性が与える影響に関する研究	岡田 大河 小川 璃々伽 下道 司 伊藤 沙也伽 上口 貴子 中山 優輝 堀 雄翔 道林 英鉄
岡本悦司	精神保健福祉調査(630調査)のデータウェアハウス化による薬物乱用患者の実態 受療行動調査のデータウェアハウス化～患者の満足度の変化にはどのような要因が影響しているのか～	匿名希望 匿名希望	谷口知弘	働く人々にとってのサードプレイスについての研究～サードプレイス・コミュニティに注目して～ 地域学習が地域雇用に与える影響～岐阜県高山市を対象として～ eスポーツの新たな社会参画ツールとしての可能性 地域鉄道が果たす自治体振興の役割～芸備線と三江線の役割を通して～ 庁舎整備への市民参加がもたらす影響と課題～京都府宮津市を事例として～	吉田 楓太 大島 賢汰 桂田 樹 工原 愛美 久保 心楽 酒井 美佑 彦坂 祐治 宮元 翼 山本 萌 横江 一真 吉野 祥汰 渡邊 竜太郎 橋本 采実 榎原 恵実 塚田 千晴 匿名希望
神谷達夫	丹波漆の魅力を伝えるには～一開発から販売までのプロセス～ 地域におけるGNSS受信機と位置情報の活用についての検討 GPSを活用した観光者行動分析と地域のイベントにおけるマーケティング戦略の構想～大江山酒呑童子祭りでの実験を踏まえて～ イラストによる地域活性化への取り組み デジタル小電力コミュニティ無線を活用した観光者行動分析～大江山酒呑童子祭りと夕日ヶ浦キャンドルナイトを通して～	津久井 慶恩 畠山 博雅 樋口 友作 森 達都 千崎 郁弥	駄菓子をツールとした多世代交流場づくり実験「駄菓子縁プロジェクト」～レトロアイテムを使った交流の場づくりとその可能性～ 駄菓子をツールとした多世代交流の場づくり実験「駄菓子縁プロジェクト」～“懐かしい”をきっかけにした多世代でつながる場が地域社会に与える影響～	高大・産学連携による若者を対象とした地域の酒蔵と地酒の認知度向上の取り組み～日本酒をきっかけとした交流の創生とそれによる日本酒消費量拡大～ 高大・産学連携による若者を対象とした地域の酒蔵と地酒の認知度向上の取り組み～若者酒づくりプロジェクトを基にした産学連携モデルの実現可能性～ 地域交流活動によるアナザーコミュニティの形成～つながり形成プロセスにおいてカフェが持つ意義～ 駄菓子をツールとした多世代交流の場づくり実験「駄菓子縁プロジェクト」～“懐かしい”をきっかけにした多世代でつながる場が地域社会に与える影響～	大島 賢汰 桂田 樹 工原 愛美 久保 心楽 酒井 美佑 彦坂 祐治 宮元 翼 山本 萌 横江 一真 吉野 祥汰 渡邊 竜太郎 橋本 采実 榎原 恵実 塚田 千晴 匿名希望
亀井省吾	越境学習の効果と仕事以外への活用可能性について ペットとの共生～地域とつながる幸福度～ 集合天才を生み出すためのリーダーシップに関する研究 自己効力感の好循環についての考察～就職活動における成功失敗体験からの検証～ 孤食・個食の増加によるZ世代大学生のコミュニケーションと食生活の変化 Z世代における鉄道利用者の乗車を阻む潜在的意識に関する研究 広告業界の未来に関する研究～Z世代に対するマーケティングの可能性～	小坂 晴 秦 濑怜奈 中武 隆人 堀江 武史 正木 杏奈 松浦 晴空 山下 魁	駄菓子をツールとした多世代交流の場づくり実験「駄菓子縁プロジェクト」～駄菓子屋が地域に与える影響と駄菓子屋が作るコミュニティについて～ 駄菓子をツールとした多世代交流の場づくり実験「駄菓子縁プロジェクト」～大学生(新規流入者)が域学連携によってもたらす影響～ 地域交流活動によるアナザーコミュニティの形成～関係人口形成がもたらす地域交流への効果～ 地域交流活動によるアナザーコミュニティの形成～初対面会話調査の可能性～ 高大・産学連携による若者を対象とした地域の酒蔵と地酒の認知度向上の取り組み～酒蔵を地域の観光資源とした地域振興の可能性について～ 高大・産学連携による若者を対象とした地域の酒蔵と地酒の認知度向上の取り組み～平和酒造の事例から今後の活動と地方の酒蔵を継承するには～	駄菓子をツールとした多世代交流の場づくり実験「駄菓子縁プロジェクト」～駄菓子屋が地域に与える影響と駄菓子屋が作るコミュニティについて～ 駄菓子をツールとした多世代交流の場づくり実験「駄菓子縁プロジェクト」～大学生(新規流入者)が域学連携によってもたらす影響～ 地域交流活動によるアナザーコミュニティの形成～関係人口形成がもたらす地域交流への効果～ 地域交流活動によるアナザーコミュニティの形成～初対面会話調査の可能性～ 高大・産学連携による若者を対象とした地域の酒蔵と地酒の認知度向上の取り組み～酒蔵を地域の観光資源とした地域振興の可能性について～ 高大・産学連携による若者を対象とした地域の酒蔵と地酒の認知度向上の取り組み～平和酒造の事例から今後の活動と地方の酒蔵を継承するには～	宮元 翼 山本 萌 横江 一真 吉野 祥汰 渡邊 竜太郎 橋本 采実 榎原 恵実 塚田 千晴 匿名希望
川島典子	北欧とアジア諸国との事例から考える日本におけるクオータ制の意義 日本の社会保障制度の課題と展望～明石市とフィンランドの事例研究を通して～ データウェアハウス集～医療事故情報収集等事業～ 自殺予防に関する考察～京都府宮津市と徳島県旧海部町の事例を通して～ ヤングケアラーの支援に関する研究～一舞鶴市の高校生を対象としたアンケート調査を通して～ 老老介護に対する支援に関する研究～綾部市社会福祉協議会の事例を通して～ 高齢者福祉施設で働く介護職員の労働環境改善に関する研究～グリーンピラ夜久野の事例から～	匿名希望 北村 文香 坂下 杏月 田中 唯翔 道田 真優 堀田 芽衣 西野 太智	河川景観のアーカイブ化における情報発信ツールに関する研究 観光まちづくりに対する混住化地域住民意識～近隣関係に着目して～ 観光まちづくりにおける外国人市民の自発的地域貢献意欲に関する研究	河川景観のアーカイブ化における情報発信ツールに関する研究 観光まちづくりに対する混住化地域住民意識～近隣関係に着目して～ 観光まちづくりにおける外国人市民の自発的地域貢献意欲に関する研究	榎原 恵実 塚田 千晴 匿名希望
倉田良樹	放課後児童クラブにおける遊びの様子とそこから見える現代社会における遊びに対する社会的制約	横山 健太郎	中尾誠二	空き家を活用した分散型宿泊施設による交流型観光のあり方～住民の能動的・受動的協力に着目して～ 地域コミュニティを活用した移住体験施設の在り方～一三重県鳥羽市・伊賀市、京都府福知山市を事例として～ 農山漁村教育民泊の受入地域に関する考察～一兵庫県豊岡市・石川県能登町・沖縄県国頭村を事例として～ 小規模農泊の運営組織に関する研究～一大分県宇佐市・玖珠町等、石川県能登町等を事例として～ “リゾート”を背負う島嶼地域の現状と展望～奄美大島等を事例として～	遠藤 優樹 岡田 彩瞳 小久保 聰耶 佐藤 遊葉 曾我部 里紗 西村 謙士 家敷 和弥
小山元孝	神社仏閣とバリアフリーデザイン ワカメ養殖業における短期就労者不足～南あわじ市丸山地区を題材にして～ 鳥取県湯梨浜町の観光業について～特にアフターコロナ政策について～ 沖縄県の貧困世帯を対象とした子どもの居場所作りについて	飯野 すず 北原 敦也 中原 友也 平良 由依	張 明軍	地域別に見る防犯意識の差異に関する考察～地域資源としての自然監視力に着目して～ 自治体は人口をどう維持していくか～コストパフォーマンス重視の恋愛～	榎原 恵実 塚田 千晴 匿名希望
齋藤 達弘	経済状況や社会階層が公共図書館の貸出に与える影響～都道府県・パネル・データによる実証分析	匿名希望	福島真治	公立中学校における労働環境の改善策に対する考察～私立中学校と民間企業での働き方改革事例を参照して～	北木 我海
佐藤 充	昭和ラブホテルの有形文化財的価値～登録有形文化財建造物制度に基づく検証～ 若者移住者の移住プロセスに関する研究～ライフストーリー研究法による調査～ リゾートウェディングにおける挙式先の選択決定要因～沖縄県のリゾートウェディングを事例にして～ クチコミデータを活用した化粧品の消費者ニーズに関する分析 なぜ若者は旅行中に写真を撮影するのか～日常生活と旅行時の撮影行動からの検討～ 持続可能な観光地における情報アクセシビリティ～カラーユニバーサルデザインの視点から～	穴吹 芽久 匿名希望 上村 遥 匿名希望 角友 佑衣 房崎 未空	星 雅丈	ビンビンコロリを実現するためには何が必要か～データに基づくPPKの分析から～ 公的病院と民間病院が担う役割の違いは何か～富山県における病床種別・病床機能の分析から～ 地域包括ケア病棟とは何か～地域包括ケア病棟のコロナ禍における変化と地域医療構想における位置づけ～	匿名希望 匿名希望 匿名希望 匿名希望 匿名希望 匿名希望 匿名希望
佐藤 恵	大学生の防災行動に関する研究	山本 七海	大田市立病院が地域において担う役割は何か～島根県における医療圈間の患者移動や病床利用率等の現状から～	匿名希望	
渋谷節子	北近畿地域における鬼の存在について～大江山の鬼伝説を見る地域の将来～ スポーツ選手に対する誹謗中傷の現状とその解決法の考察 アフリカの貧困と教育問題～市民としてできることを考える～ 菜食主義の背景と生活に及ぼす影響 児童虐待の現状と対策～一国・地方・民間の対策の事例研究～ サブスクライブサービスがアニメ文化にもたらす発展 在日フィリピン人の労働問題と今後の展望～在日ブラジル人と対比を通して～ 同性愛の歴史、現状と課題：多様性のある社会の実現に向けて	匿名希望 岩根 孝祐 曾田 茜 匿名希望 長屋 彩乃 藤田 雄也 松林 夏希 三尾 彩子	山田 篤	ドクターHの運用実態についての研究～期待されている機能が果たされているのかをデータから検証する～ 病床コントロールとは何か～医療機関の特性による病床運用のパターン分析～ 広島県中山間地域の医療ICTで守ることができるか～広島県における医療圈設定の問題と同地域の将来を見据えた方策の検討～ 石川県の周産期医療～能登地域の周産期医療体制の現状～	匿名希望 匿名希望 匿名希望 匿名希望 匿名希望 匿名希望 匿名希望 匿名希望 匿名希望
三好ゆう	47都道府県産業連関表におけるFLQ値の推計	濱田 遼			
山田 篤	SNSを用いた地域の情報収集～X(旧:Twitter)ユーザーによる北近畿地域のブランドイメージ～ 日米教育システム比較研究～現状分析と改善への提案～ 過疎地域の財政基盤と立地企業の関係～広島県府中市を例に～ 自家用有償旅客運送の持続可能性について～兵庫県丹波篠山市を事例から～ 津軽鉄道線の鉄路としての維持～観光列車の運行についての考察～	日下部 昇 佐藤 俊尚 匿名希望 安室 垂美 匿名希望			

## 地域キャリア実習



### プログラムについて

本学では、大学での学びと社会での経験を結び付け、学生の学びの深化や学習意欲の喚起、自己の職業適性や将来設計について考える機会を学生に提供することを目的に、教育課程に「地域キャリア実習」というプログラムを位置づけております。この「地域キャリア実習」では、広く一般に募集を行っている大企業等のインターンシップだけでなく、北近畿を中心とした地域の事業所にて就業体験ができる機会を設定し、学生からは普段目につきにくい企業の情報に触れる機会を設け、将来設計について考えるための多種多様な材料を提供したいという意図も含まれています。

### 実習までのスケジュール

4月～5月	協力企業への呼び掛け
6月	実習希望学生の募集及び選抜
7月上旬	学生の実習先決定、事前研修
7月中～下旬	実習先事前訪問(打ち合わせ)
8月～9月頃	実習(8月中旬～9月末頃で5日間～10日間) ※企業によっては10月に実施も有
9月～10月頃	報告書の作成
12月	学内報告会の実施

## 綾部市役所 定住・地域政策課

地域経営学部地域経営学科 岡田 唯花

### はじめに

本稿では、綾部市役所定住・地域政策課にて行われた実習について、その内容と、そこで得た学びについて報告します。綾部市役所定住・地域政策課を実習先に選んだのは、私が現在住んでいる綾部市で特に力を入れていると感じる移住定住や水源の里の取組について学ぶ中で、綾部市役所での業務や市職員としてどのように地域と関わっているのかを学びたいと考えたからです。私は将来行政職員として働くことを考えているため、地元である綾部市にどのように貢献できるかについて考えるきっかけにしたいと思い志望しました。

なお、綾部市役所定住・地域政策課の概要については以下のとおりです。



### 実習先概要

＜所在地＞京都府綾部市若竹町8番地の1

＜主要な事業内容＞

- ・定住に関する業務(移住のサポート、空き家や住宅団地の分譲など)
- ・水源の里に関する業務(水源の里の地域振興や地域振興支援センターの運営など)

### 実習の概要

実習は、9月4日から9月8日の計5日間の日程で実施されました。各日における実習の内容は主に以下の通りです。

- 【1日目】水源の里、移住定住についての説明、水源の里の見学、空き家見学同行
- 【2日目】空き家の外観写真の撮影、綾部市資料館見学、空き家の資料作成
- 【3日目】とちの実拾いボランティアに参加
- 【4日目】上林城址見学、老富のシャガ・ミツマタ見学、自治会の人のお話を聞く
- 【5日目】コミュニティナースの説明、コミュニティナースの活動見学

### 実習を終えての学び

綾部市役所定住・地域政策課での実習を通して、これまで住んでいるだけではわからなかった綾部市のことを沢山知ることができました。

まず、1日目と2日目では移住定住の業務について重点的に学びました。移住定住の業務について学ぶ中で、綾部市に来られる移住者の方は豊かな自然や自分ならではの生活を大切にされる方が多いと感じました。その中で、綾部市の問題でもある空き家を移住者の方によりよい条件で購入いただくためには、1つ1つの業務がとても大切だと分かりました。また、空き家といっても様々な状態がある中で、市民の皆さんのが安全に暮らしていただくためには空き家バンク等の取組を通じて市民の協力を得つつ管理していく必要があると考えました。

3日目からは水源の里である上林地区にある上林いきいきセンターで水源の里に関する学びました。はじめに綾部市の中でも特に人口の少ない古屋という集落で行われているとちの実拾いボランティアに参加しました。古屋の地域について学ぶ中で、人口が少なく生活に不便さを感じる地域でもそこに住む人々が自分のふるさとへの思いから暮らしていること

が分かりました。古屋ではそこに住む人を応援する人々がとても沢山おられ、とちの実拾いのボランティアには遠くから多くの参加者が訪れていました。地域は住むだけではなく外から支えることもできるということが分かったとともに、綾部市には多くの人を引き付ける魅力が沢山あると改めて気づきました。

上林いきいきセンターでは、集落支援員より地域に出て活動している職員の方々が多く、市役所の本庁だけではできない仕事があるとわかりました。集落支援員の方やコミュニティナースの方々が地域の方ととても近い距離感でお話されていて、基礎自治体の職員として働くうえで地域との関わりはとても大切だと感じました。

綾部市役所での実習から、より綾部市や基礎自治体の業務について学ぶことができ、自分に足りない視点などを学ぶことができました。ここで得た学びを今後の大学での学びに生かし、将来地域に貢献できる人材となるよう尽力したいと考えます。

## はじめに

本稿では、株式会社FoundingBaseにて行われた実習について、その内容と、そこで得た学びについて報告します。今回、この企業を実習先に選んだのは、候補企業唯一のベンチャー企業かつ、「地方創生ベンチャー企業」という部分に魅力を感じ、FoundingBaseでの実習経験が、将来地元で地域に貢献するような仕事を行いたいと考えている自分にとって有意義なものになると思ったからです。また、ベンチャー企業で実習することで、一般企業の実習では得られない経営の特徴や社内の雰囲気を学べるのではないかと考え志望しました。

株式会社FoundingBaseの企業概要は以下のとおりです。



## 実習先概要

<所在地>京都府宮津市鶴賀2164-2

<主要な事業内容>

1次産業、教育、観光、企画運営(シティプロモーション・スペース、ツアーなど)

## 実習の概要

実習は、8月25日から8月28日、9月23日、9月24日の計6日間の日程で実施されました。各日における実習の内容は主に以下の通りです。

【1日目】自己紹介、インターン内容の説明、講義(地方創生とは何か／FoundingBaseの会社紹介、まち歩き、交流イベント「ひとつまみ会」)

【2日目】イベント「ビーチサイドBAR Les Pins 2023」事前準備+運営サポート

【3日目】イベント「ビーチサイドBAR Les Pins 2023」事前準備+運営サポート

【4日目】イベント「ビーチサイドBAR Les Pins 2023」後片付け

【5日目】イベント「宮津BANPAKU」企画構想+準備

【6日目】イベント「宮津BANPAKU」事前準備+運営サポート

## 実習を終えての学び

FoundingBaseのインターンでは、「地方創生ベンチャー企業」の特性を、知識だけではなく体験として得ることができました。特に、業務のフレキシブルさと、地域住民との距離の近さは、他の企業や組織のインターンでは得られない経験だったと思います。

まず、1日目の内容が終わった後に参加させていただいたイベントである、FoundingBaseが運営している「クロスワークセンターMIYAZU」は、宮津市民の交流の拠点でありながら、地域で何かをやってみたいと考えている人々を支援する出発点でもあり、その日も近所の高校生たちや北近畿で活動されている大人の方々が集まり、交流していました。初日ということもあり緊張していた大学生と比較して、イベントに参加していた高校生は積極的であり、大人の方と会話するだけでなく、自身の活動のことや悩みなどを相談していました。自信をもって話す高校生の姿に驚くとともに、この場所がフレンドリーな交流を促進する場所として、地域に認知されているということを感じました。

2日目から4日までは、天橋立て開催されたイベント「ビーチサイドBAR Les Pins 2023」に携わりました。このイベントの特徴として、出店者が推薦で選ばれていることがあります。運営やほかの出店者がおすすめしたお店しか参加できないため、出店したお店やそこのスタッフの方たちはみんな魅力的であり、出

店者同士も関係性を築きやすいということが、スタッフとして関わっている中で分かりました。これまで、様々な地域のイベントに参加し、時には企画に携わることもありましたが、これだけの魅力的な人脈を持ち、それらを組み合わせて、参加者だけでなくスタッフも楽しいイベントを作っている例はほとんど見たことがなく、自分ではまだ作れないと思ったので、地域交流の参考になった反面、その目標がまだまだ遠いことに悔しさを覚えました。

5日目と6日目は、それらの経験を踏まえて、実際にインターンのメンバーでイベントの企画に挑戦しました。インターンが始まるまで面識のなかったメンバーではありましたでしたが、実習を通して、スムーズに連携できるまでの関係性を構築することができたと思います。しかし、それでも企画を考えるということは難しく、いろいろと試行錯誤を繰り返して内容を詰めていきました。その企画では目標人数や金額を定めましたが、結果としてはそれを達成することはできませんでした。企画時の予想と実際は異なることや、縦密な計画を立てても当日は思わぬハプニングが起こるということを、身をもって実感しました。悔いは多少残る結果ではありますが、実習担当の筒井様、谷内田様からは、それまでの大学生の努力や企画の方向性を評価していただいたので、短い期間ではありましたが、インターンのメンバーと一緒にイベントの企画ができて、本当に良かったと思います。

## はじめに

本稿では、但馬信用金庫にて行われた実習について、その内容と、そこで得た学びについて報告します。但馬信用金庫を実習先に選んだのは、私が就職活動において地域に根差した地域金融機関を志望しているため、実際に地域のために活動されている但馬信用金庫にて業務内容を学ぶことで、地域金融機関で働くイメージを持ちたいと考えたからです。

なお、但馬信用金庫の企業概要については以下の通りです。



## 実習先概要

<所在地>兵庫県豊岡市中央町17-8

<主要な事業内容>

信用金庫法に基づく金融業務(預金、融資、内国・外国為替、有価証券投資、各種代理業務、保険商品・国債等公共債及び投資信託の窓口販売、電子債権記録業ほか)

## 実習の概要

実習は、9月1日から9月5日の計5日間の日程で実施されました。各日における実習の内容は主に以下の通りです。

【1日目】但馬信用金庫本店にてオリエンテーション、マナー研修

但馬信用金庫の取り組み紹介、学会打ち合わせ、フィールドリサーチツアー(同)

【2日目】地域活性学会運営補佐

【3日目】地域活性学会運営補佐

【4日目】地域活性学会効果検証、他の学会誘致の是非検討、産業関連表の分析

プログラム研究内容の豊岡での試行検討

【5日目】前日続き、成果報告会

## 実習を終えての学び

但馬信用金庫でのインターンは、地域に根差した金融機関としての本業支援について他地域と差別化した取り組みを紹介、実際に行った業務の疑似体験が行われると想定していました。しかし、実際の実習では、同金庫が実際に取り組まれている地域活性学会の誘致について今後の方向性や意義について学ぶことが中心でした。学会の誘致、協賛は但馬信用金庫が中心に行っており、但馬地域に経済効果があったことは定量的に示唆されました。しかし、学会を誘致した所で、同金庫に直接的な収益は一切ありません。そうであるにも関わらず、同金庫が主導となって地域に学会を誘致する意味は、主催者、参加者とともにその開催地に比較的長く滞在することになり、宿泊、飲食、観光など様々な消費を誘発します。引いては、地域の複数の産業に大きな経済効果をもたらすことができるからです。さらに、様々な業種の人々が一堂に会することで、予期せぬ出会いや繋がりを生み出し、新たなイノベーションが創出されます。つまり、但馬信用金庫が学会を誘致することで、新たなイノベーションの種の段階で、ハブの役割を果たし、これから成長

企業に融資をすることができ、後にキャッシュを得ることができます。地域としても学会誘致は直接的な経済効果を得ることができます。地域の活性化も行われています。一見、地域にとってどのような効果があるのか分からなかった学会誘致でしたが、地域密着型の信用金庫として重要な意味を成す取り組みであることが理解できました。

本インターンに参加したこと、自身の想定していた信用金庫の在り方と実際のギャップを埋めることができ少しきれいなと思います。また、自身の志望する金融機関についてどのような考え方で業務に取り組んでいるのか、但馬信用金庫の職員の方々から多くの学びを得ることができました。本インターンで直接的な指導を頂いた但馬信用金庫の職員の方々に深く感謝申し上げます。

# 医療福祉経営学科 病院実習

## 診療情報管理士とは

病院で日々発生する患者さんの診療に関わる重要な**情報の番人**であり、医師や看護師が作成した診療記録をチェックする**お目付け役**であり、病院に蓄積する情報を分析し、診療や病院経営に必要な知見を提供する院内の**コンサルタント**です。

### ● 実習病院を決める ●

実習でお世話になる病院は、以下の流れで決まります。

- ① 実習を受けたい病院の候補を探す。  
(学生)※3年次3~4月
- ② 病院に依頼状(予告)を送付する。  
(大学)※3年次4~5月
- ③ 病院に連絡を入れ、実習の受け入れを依頼する。  
(学生)※3年次4~5月
- ④ 実習病院が決まる。※3年次6~7月  
□ 依頼状、協定書 □ 自己紹介書の送付・持参
- ⑤ 実習病院の事前調査・研究を行う。  
(学生)※3年次6~7月
- ⑥ 実習病院に事前挨拶に行く。  
(学生・大学)※3年次8~9月

病院さんにも様々なご都合があり、ご希望が必ず叶うとは限りません。その場合は、先生と相談しつつ実習病院を再検討することになります。

### 実習病院を行う理由①

**診療情報管理士認定試験**の受験資格を取得するには…  
**3年次前期まで**に、以下の全科目的単位を修得し、さらに、**病院実習**に赴く必要があります。

- <1年次>
- ・解剖生理学
  - ・感染症・呼吸器学
  - ・医学英語
  - ・血液内分泌・腫瘍学
  - ・医療概論

- <2年次>
- ・精神神経・循環器学
  - ・消化器・尿生殖器学
  - ・医療管理論I
  - ・医療情報学
  - ・診療情報管理論
  - ・周産期・先天異常学
  - ・皮膚筋骨格・中毒学
  - ・医療管理論II
  - ・医療統計学
  - ・診療情報分類法総論

- <3年次>
- ・医療管理論III
  - ・診療情報分類法演習
  - ・**病院実習**

### 実習病院を行う理由②

病院実習は、認定試験の受験資格を取得するためだけに行うのではありません。

普段、絶対に入ることのできない病院事務職や診療情報管理士さんが働く空間にお邪魔して、普段の業務の流れ、他職種とのかかわり、会議の様子などを見ることができます。病院によっては、情報の入力やデータの分析などを経験できます。

それまで机上で学んだことが医療現場でどのように活けるかの**実感**が伴うことにより、勉強や就職活動に向けてモチベーションを高めるよいきっかけになります。

## 学生は何を学んだか

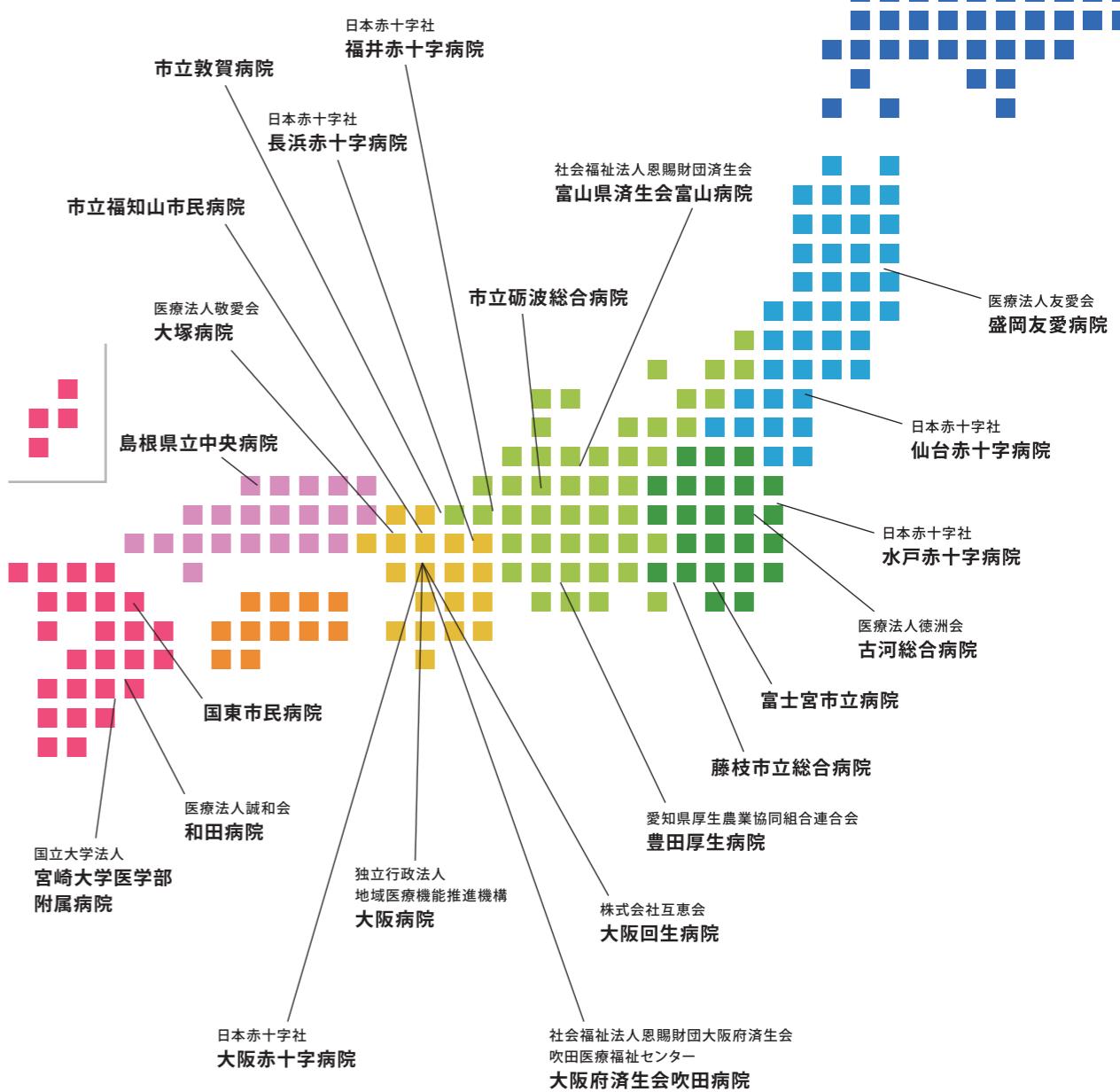
- ・現場の診療情報管理士さんは、総じてコミュニケーション能力が高く、非常に責任のある業務を担っていることを改めて学びました。
- ・退院する患者の情報を一人一人確認していく作業はとても神経を使う仕事であり、時間がかかるものだということを学びました。
- ・大学で学んだコーディングルールとは異なる独自のルールが作られていました。そうすることで後に情報を集めやすく、利用しやすくなると教わりました。つまり、現場では正しいコーディングだけが求められるわけではないことを学ぶことができました。
- ・診療報酬請求では、コンピュータでは困難な算定要件や請求漏れの細かいチェックなどを人の知識やスキルで補う必要がありました。
- ・自分自身で仕事の限界を作らず、向上心のある人が求められていることを知りました。

## 学生は何を感じたか

- ・紙カルテを廃棄する作業の中で、電子カルテの便利さ・情報把握のしやすさを実感できました。
- ・PCスキルの重要性を痛感しました。
- ・情報を見極める力、情報を組み合わせる発想力などの、情報リテラシーが必要であることを実感できた実習でした。
- ・実際の現場を体験する中で、授業で学んだ事柄が多く出てきたため、今回の実習は実践的な知識の総復習となりました。
- ・傷病名やそれに対応する手術などの医学知識が必要である場面が多く、医学知識のなさを痛感したため、もっと勉強を頑張ろうと思うきっかけになりました。

(病院実習報告書より)

## 2023年度 実習をお世話になった病院





地域経営学部 地域経営学科／医療福祉経営学科  
情報学部 情報学科

---

〒620-0886 京都府福知山市字堀3370  
TEL.0773-24-7100 FAX.0773-24-7170  
<https://www.fukuchiyama.ac.jp>

---

